



代序

みぞ見てし秋のつく夜は照せれど

相みしいもはいやとしさかる

すまを引手の山にいもを置きて

山路をゆけばいけりともなし

紅葉をしげみまどはせる

いもをもとめむ山路知らずも

柿本朝臣人麿





あ
ら
露

後
藤
宙
外

第
一
回

此方よりは見えねど月あればか、蒼黒く澄める空の色、地上に近
 き邊は海閣となりて、晝は心附かざりし松の枝態の面白きが墨繪ら
 しく、庭の中牆にせる扇骨木越しに木蓮の白き花、崩るゝばかりに
 咲きて、夜風に揺めく状おぼるなり。

絢子は断崖に立てる裏二階の柱に凭りかゝりて、遐邇の梅の盛時は
 昨日と思ひし夢の跡、文なき景色を恍然と眺め入る。谷一つ對岸な
 る七軒寺町の寺内の樅樹、際立ちて高く、早稲田邊の木々より、目
 白臺まで續く幾蜿蜒の簇木は、宛然闇夜の荒海に大濤の、遠く捲き

低く揺り落とす状とも見ゆ。二點三點の燈火、高臺なるは鮮明に、窪地のはかすれて草蔭の莖に似たり。目白臺の右に當たる小高き所に明星の如く輝く一つの燈火に眼の留まる途端、絢子は、

「あゝ雀部さんの所は、丁度彼處邊なんだわ。」

と獨言、凝目と頸をのべて再び見直し、直ぐに俯向いて深い溜息吹き、其の儘なるやうに柱より身を落として、欄干の上に力なげに凭り掛かりぬ。袖に挿し顔を掩ひて、何やら微に歎歎く聲も聞ゆるやうなり。

「お嬢様、何を遊ばして居らっしゃる。」

と障子越しに、お側去りの加彌に呼びかけられ、絢子は少し驚き、窺と眼を拭き直して、尙外の景色を眺め居る様子にて、

「何も致しては居ないやね。鬱陶しいから、戸外を眺めてみますよ。」
「尤う大概になすつて、お休み遊ばせよ。お風でも召すと宜けません。」

加彌が此所を締めませう。サお休み遊ばせよ、よ、お嬢様。」

絢子は加彌の言葉は耳に入らざる様子にて、欄干に兩腕かけて紐り付きし儘、身動きもせず俯向き居る。加彌は焦燥がりて、

「サ、お休み遊ばせよ。お風でも召すと又た加彌が奥様に叱られます。」

と言葉に力を入れる。絢子は漸と、

「あゝ、今往くから……。」

と溜聲で云つて、「マア、打捨つて置いてお呉れ。」をば身振で見る。加彌は窺と側に寄つて、絢子の顔を覗き込み、

「アラ、マア、何なすつたの。泣いて居らっしゃるよ。一轉何遊ばしたの。」

と軽く絢子の肩に手をかける。絢子は無言で、見られぬやうに側の方へ顔を捻る。加彌は自分の顔で絢子の顔を追駈けながら、

体たれ作人が
天

「志ません、春と云つても、今夜あたりは遺塵に寒いの、貴嬢も餘り分らない。」

と障子を締め、

「悔しくも、悲しくもないと仰有るんですね。」

と少し考へ、

「だつても、貴嬢、嬉しくつて泣く方が御座んすものかね。」

と繰返して、退引させずと問ひ詰める。

「加彌、私はねえ。」

と言ひ淀みて復泣き崩折れて了ふ。

「貴嬢はマア、如何なすつたんですよ。」

と加彌は急ぎ込む。絢子は漸と頭をあげ、露重き朝顔の風情哀れに、躊躇かゝるやうに加彌の方に身を捻りて打臥し、

「加彌や、私はね、私の泣いてるのはね、餘り嬉しくつて、胸が充

「何か悔しい事がお有んなさるんだよ、屹度。其れなら其れで、嚴然と加彌へ爾仰有つて下さいましよ。何ですれえ、貴嬢は私に愚達などをなすつてさ。其れでは私が慙うやつて、長年お側で御奉公を致してゐる効も御座んせんぢや、御座んせんか。」

と少し怨みを含みし調子なり。

「加彌や、私は何も悔しくつて、泣いてるんぢやないけれども……」

「ぢやア、何で御座んすか、悲しい事でも……」

「否。」

「其れでは……、だつて貴嬢、嬉しくつてお泣になるてえ法はないぢやア御座んせんか。」

と無理に絢子の手を取つて、座敷の内へ伴ひながら、

「サア、先ア何でも此方へ入らつしやいよ。お風召すと宜けア

満になつて、其れで泣くのだよ。私が堪へて、我慢して、雀部さん
 を思つてゐることを、只一言も口へ出さずに仕舞つたばかりで、焦
 れ死になさうとした、百合子さんを助けて上ることが出来たと思
 ふと、私は嬉しくつて、泣かずにやゝ居られないわ。」
 泣き臥したる絢子が黄八丈の羽織の脊より、夜會結の頭にかけて、
 側に据たる臺附の洋燈の光が、薺形の火屋を通して、草色と桃色と
 の斑染に照して居る。卒に笹をゆる如き音さら／＼と戸外に聞こえ
 始むるに、加彌は「オヤッ」と立ちあがりて、縁側に駆け出で、周章
 しく戸を繰りて締切をなし、元の席に戻りて、再び泣きゐる絢子の
 姿を凝目と見詰め居る間に、早や眼はまばたきして、唇へ始めぬ。
 溜りかねてか、前倒るやうに、絢子の側に膝をずらし、
 「お嬢様貴嬢は餘り義理が堅過ぎて宜けません、御遠慮なさるも、
 内氣が善いと云ふのも、事に依りけりぢや御座んせんか、嬉し過ぎ

て泣くのだと仰有るけれども、其れア皆な嘘、嘘、嘘に違ひありま
 せん。其ら程思つて居らつしやる雀部さんに世話を致さう、丁度適
 當い御縁だからつて、山瀬さんがお媒妁なすつた時に何故貴嬢は判
 然彼の方へならば参りませうと奥様へ仰有いませんでしたよ。百合
 子さんがお可憐さうだからつて、御自分の思つてゐる方を、態々お友
 達に取られるやうに、爲さるつてえ事が何處の世界に御座んすもの
 かね。眞實に私は餘り情ない事をなすつたと思つて、涙が出ます。」
 と咽びながら、叱り附けるやうに詰る。
 「だつて、加彌や、お前は爾云ふけれども……。」
 と絢子は袖を顔にあて、身を起こす。
 『だつて』ぢやありません、那樣分らないのはありやア致しません。
 「だつても、お前百合子さんの方は、彼の方都合になられなければ、
 ば、焦れ死にをするのが知れ切つて居るんだもの、姉妹よりかゝる親

しく致てる、友達の生命を助けると思やア、此の位の辛い思ひは何でも有りやア致ないわ。

「貴嬢はね、宜けません、負け惜みを仰有る、お口程な剛いお氣性なら、何故那樣にお泣き遊ばすのですよ。」

「だから、何ぢやアないか、其の譯を云ッて聞かしたぢやアないかえ。」

「否、承まはりませんよ。と些と腹立たしさに云ふ。」

「分らない人だねえ。」

「貴嬢こそ。」
絢子は俯向いて、少時く考へ込み、知られぬ程にする溜息も、加彌が耳には能く聞えたり。

「ぢやア、今一遍云ッて聞かせるわ。私はねえ、百合子さんがね……。」

あのね。」

「百合子さんが、何遊ばしたッてんですよ。」

「お前はマア、何故、兩性急なの。先ア黙止ッてお聞きなさい。百合子さんが、彼れ程慕ッて居らした方と、本望通り結納の交換も

濟んだのだから、無飛び立つやうに喜んでお出でなさるだらう、と考へると、人事とは思へない、あゝ奈何に嬉しからうと思ふと、胸

が充滿になつて、嬉し涙が途離れたのなんだよ。」

「貴嬢は宜い加減な事を仰有ッて、加彌を欺罔さうとなさる、憎らしいお口で居らッしやる。」

「それはお前の僻見といふものだわ、私はねえ、眞實に爾思てよ。宅の爺様と雀部さんとは如彼關係もあるから、山瀬さんが爾仰有ッ

た時に、私が往きたいやうな舉動でも見せやうもんなら、山瀬さんは早合點の方だから、奈何ことになつたッたかも知れア致ない。其

れにね、雀部さんも義理で、否とは仰有りもなさるまい。爾なれア
 手をかけて殺さないまでも、私が百合子さんを殺したも同然な、悲
 しい事になつたらうと思ふわ。私が些どの辛抱致したばかりで、あ二
 人を満足させて、お友達に楽しい家庭が出来るとかと思やア、私
 人たる道にも協ひ、友誼もつくした事になるから、這麼心持の宜い
 ことはありやア致ない、情に負けて無くなさうとした寶を、良心の
 指圖で拾ひ返したやうなもんだからね。其れアね、私は尙修業が足
 らないから、人の満足をみるに附けて嫉むのぢやないけれども、濟
 まないと思ひながらも、羨ましいと不圖思はないことはない。其れ
 だから、變に淋しい感じのする事もあるけれども、是れは自分の到
 らぬのだ、と直ぐに考へ直すと、後は露々して、胸の中も朗快する
 から、躰して悲しいことはありやア致ない、必ず私の事なら、餘計
 な心配を致してお呉れでないよ。」

「眞實に貴嬢は仰有ることが、巧くツて居ラツしやる。けれども、
 あ心の底は奈何だか知れたもんぢやアない。」

加彌は襟掻き合せて、居住ひを直し、暫くは睡れるやうに眼を閉
 ぢて萎れ返り、纏て發と吐息吹き、急に覺めたる如く洞然と眼を開
 いて、絢子の顔を熟々眺め、

「是れ程の御標致で居ラツしやりながら、此の位結構な御身分で居
 てゐて、其れで、御自分のあ心柄で、餘計な御遠慮をなすツて、思
 ふお方の奥様になられるものを、成られぬやうに、態々なすツたの
 かと思ふと、加彌は悔しくツてなりやア志ません。」

「お前は爾思ふだらうけれどもね、其れはお前の考への方が違ツて
 るんだよ。」

「否、違ツて居や致しません。」

「爾ぢやなら、違ッて居ますよ。」

「否、いえ、私の考へは確で、貴嬢の御了簡の方が間違ッて居るので御座いますよ。」

「爾ぢやないんだから、先アお聞きと云へば。」

「否、聞きません、何故貴嬢は彼程良い御縁をお断りなさいましたよ。彼程良い旦那様を奈何いふ御了簡で、マアお嫌ひ遊ばしましたんですよ。」

「誰も雀部さんが可厭だからッて、山瀬さんのお話を断りア致ないわ。彼程私が云ッて聞かしたのが、お前には尙分らないのかい。」

「えいえ、分りませんともさ。何程お友達が大事だからッて、御亭主になさるべき方にまで、熨斗を附けて上げるにやア當たらなひは、御座んせんかよ。」

絢子は抑へるやうなる手附で乗掛カッて来る勢の加彌を制しぬ。

第二回

早稻田々圃を隔て、芭蕉庵の森を眺むる、牛込鶴巻町の一隅、若荷畑に向ひて杉の生垣廻らせる狭少なる借屋は、飛鳥正信が住所なり。娘百合子は、眺望好き北向の六疊の眩掛窓に凭れ、外の景色を眺めながら、心には來月の初旬に迫る戀人と本望通り結婚の曉、樂しい境界になつた事のみを思ひつけ、何處に瞳を注ぐでもなく、唯恍然と空を見詰めて考へを凝らす。夫の雀部が火鉢の向ふに坐ッて、何やら西洋の小説を讀んでは、深切に其の中の戀話を咄して聞かせる優しい聲も微に耳に響くやうに思ふ。其の話の筋が、奈何にも自分達二人の上に似てゐるので、熱心に聞いてゐる中、夫婦になツて間もなく、男の方が死んだので、思はず自分が涙を翻すと、良

人は話を止めて、微笑みながら、背を撫で、慰さめて呉れる、其の情深い顔も幻影のやうに心に浮ぶ。直鼻頭を掠めて、ぼろんと羽音烈しく飛び去った雀に驚かされ、目の覚めしやうに、想像の影破れると同時に、不圖雀部から學校に居た時分、或西洋小説の講義を聞いたことを思ひ起こしぬ。何の譯であつたか、少しばかりの事から喧嘩を始め、自分が無言で執拗て隈へ寄つて考へてゐると、良人は庭の椿の花を拾つて、笑ひながら自分の背へ敲きつける。其の花俄に敷を増して、雨のやうに自分の頭の上に降り頻る。忽ち心に吉野へ新婚旅行をしてゐる二人の陸しい姿が映つて来る。百合子は漸と我に歸りて、縫ひかけてある不斷着に取りかゝる途端、母親は入り來たりて娘の側に坐りぬ。

「百合子や、お前其れを早く縫つてお了ひよ。其れが出来たらば、彼の下着に掛からなくツちヤアならないから。」

「あゝ、爾致ませうよ。」

「仕立屋さんへ遣る方が、一躰早いだけけれども、私のお古を胴にするんだから、世間へ出すのも耻かしいからね、矢張お前が拵えて了ふ方が宜いよ。」

「是はねえ阿母さん、今日中には出来ますから、仕立屋さんになぞ、出さなくたつて宜ござんすわ。」

母親は娘が縫ひかけて居る、仕事を手に取りて熟々眺め、

「お前も去年あたりよりか、餘程巧くなりましたよ。此の襦は今些と丸く致たら奈何だい。」

「爾ですぬ、後で直しませうか。」

「爾も致なさいよ。此所は一番仕事の手際の分る所なんだから。」

「爾ねえ阿母さん。」

「今隣家の安藤さんが見えられて、尤も其れはね、お世辭なんだら

うけれども、大變に雀部さんの事を、褒めて爾云て居らしつたよ。眞實にお前は仕合者なんだから、何でも彼方へ往つたら、萬事に氣を附けて、善く勤めないぢやアなりませんよ。其れに序だから、教へて置くけれども、女中でも書生さんでも、都て召し使ふ者に悪く思はれないやうに致なくてはなりませんよ。开もない事で下女下男の怨を着た爲に、飛だ厄難を身に引受けることが、世間には有勝ですよ。宜いかえ。人を使ふは使はれる、と云ふから、何でも如才の無いやうに、致なくては、大きい所へ往けば往く程、勤まりませんからぬ、其所を能く吞込んで、居らつしやいよ。」

百合子は始終俯向いて、耳傾けて聞きわたり。

百合子は如何云ふ理由か、自分にも合點はゆかねど、日頃慕へる人の妻と定まれる今の身は、例へば百花咲き競へる春の野を見渡すばかりに、氣暢び心も麗朗に、生暖なる風に動く香の裏を行く心地し

て、唯愉快に、唯樂しかるべき筈なるに、左はなくして、奈何なる譯か、心の底に潜む一點の憂は、攘へども攘へども去らざりき。長閑なる空の何處にか、掌大程の黒雲顯はれて、雨と成るか、風を起すか、と形を眺めて、明日を氣遣ふ趣きあり。思ふ人と借老の契は、上なき喜悅なれど、側離れし事なき親の膝を離れ、住みなれし我が家を立出で、他人の間に往く身なれば、心に陰日向の二側あるは無理ならぬと、此の愁雲の蔽ひかゝるは、其の爲ばかりではないやうに思はれてならず。熱愛の裏には並ならぬ恐懼の附纏ふが常なり。若し朝夕起臥を共にするに隨ひ、我が身の足はぬ所も戀人の眼に留まりて、之れが萬一嫌はるゝ基になるやうな事がありはすまいかなと思ふに附け、苦き潮流と甘き潮流の二筋道に、心の迷ふのであらう、と自分でも不圖考へては見たれど、尙々奥深きところに残れる大いなる原因の、おぼろに見透さるゝやうに思はれてならず。

カめて其れを探らうとすれば、田の面の月を掬はんとして、濁水に光を掻き消す如く、追ひ究はめやうとすると等しく、忽ち其の影を失うて効なし。

百合子が母親は、娘が身の仕合を喜ぶ心面にあらはれ、左も痛しげに莞爾々々去ながら、愛色を含みて光濁れる娘の眼元には氣も止めず。唯忸怩むとのみ思ひ取りて、

「お前は眞實に幸福兒だ。標致と云ひ、學問と云ひ、雀部さん程の人は多度は世間にはまない、と誰だつても褒めない方はない。其れに第一、氣遣が優しくつて、老人にも、若者にも、深切深い方だといふ評判だから、爾いふ方に連れ添ふと云ふものは、能く前は運強く生まれたんだよ。だがね、人は有卦に入つて油断を致さないのが、大事だと云ふから、幸福が宜ければ宜い程、女の修みを守つて、假にも我儘な氣なぞを出してはなりませんよ。」

百合子は祈禱でも聞くやうな姿で、始終謹んで耳傾けて居しが、漸々と顔をあげ、

「阿母さん、私は決して、幾等彼方で宜くして下さつても、増長なぞして、我儘な了簡などは、出さない積で居ますから……。」

「爾だよ、其れでなくては宜けません。大概の者は良人が大事に致して呉れると、宜い氣になつて、徐々附上るものだから、遂亭主を疎末に致たり、姑を馬鹿にするやうになります。其れも始めの中は珍しいから、良人も暫くの間は妻の我儘も結句初心だからだ位に買被つて、大目に見て置くものなんだから、波風も立たずに濟むけれども、長い間には爾は往かない。其れが氣まづくなる基になります。姑だからつても、其の通りで。始めは馴ないからだからと、萬事は怒して、お容様扱ひも致して置うが、其れは長くは續くものぢやありません。何でも、昵懇むに随つて、遠慮のなくなるのが、過失の

元になるから、決してく油断さへ致なければ、何處へ往つても、勤まらないと云ふ法はないものなんだから、其所を能く呑み込で、居なくつてはなりませんよ。」

「眞實に阿母さん、爾ですれえ、阿母さんの仰有つた事は、胸の守護神に掛けて、忘れア致しません。」

「その心でさへ居れば、間違ひつこくない、身に泌みて聞いてお置きなさいよ。」

百合子は母親の教訓を聞き終り、少時は伏眠になりて、深く考へに沈み居るらしく、俯向きし眉の間には、何となく憂の雲一重かゝりて、胸の思ひに悩み惑へる様なれば、母は氣掛かりになりて、

「お前、何か致たのかい。大變に鬱いで居るやうぢやないかえ。」

「否、鬱いでるんぢやありませんけれども……。」

と分疏して、俄に莞爾と笑顔つくれど、秋雨に咲く花一輪、淋しさを

を増すばかりなり。母は尙目を離さず熟々と娘の様子を見守り、

「お前、何だね、何か心配事があるんだね。有るなら隠さずに爾仰有いよ。聞かない中は阿母さんも心配をするからね。」

と優しく云つて、再び百合子の顔を見詰る。

「彼のね、阿母さん。」

「何だろ。」

後を引き出さうとした此の間は、却て百合子が氣先を折たものか、直に百合子は口噤みて、忸怩と逡巡して了ふ。

「何だろ。」

と二の矢を受けても、尙躊躇ひて、早速には切出さず。母が焦燥しさうなる顔色で見返す時、漸と、

「實はねえ阿母さん、心配で心配で、溜らない事がありますけれど……。」

「だから、匿さずと爾お云ひなさい、と爾云ッて居るぢやないか。」
 「這處ことを云ふと、阿母さんに餘計な御心配を掛けるから、と思ひますけれども、私はねえ阿母さん、一昧餘り苦勞性なんです、先様ぢや私の不束な事も、何も彼も御承知の上で、貰ッて下さるのだからとは思ひますけれども、恚いふ世間見ずの行き届かない者ですから、如何いふ事で越度を仕出來して、お氣に入らないやうになるかも知れないと思ふと、其れが心配でなりませんの。」
 と羨れ返る。

「お前のやうに、爾取越苦勞を仕過ぎても宜けない。自分が不束だと氣が附いたら、何でも萬事に氣を附て、力にありだけの勤を致して、陰日向なく働いてさへ居れば、不束は不束ながらも先方様に不便が加はり、爲ることには失があつても、心達に免じて、自然と怜しがあつて、自然と憐れが加はるやうになるのは人情だから、其所を心得て居さへすれば、雀部さ

んは優しい方だもの、置いて下さらない筈はない。餘りくだらない心配はお致でないよ。」
 「爾ですかね。」

と云へども、尙落着かぬ目色なり。又暫く考へて出直し、
 「變な事を云ふやうですけれども、私のやうな者が、雀部さんへ嫁くのは、餘り僥倖過ぎて、若しか果報焼で、意外思ひ寄らぬ事でも出來は致まいか、悲しい思ひをするやうな、不仕合に萬一かなりやア致まいか、と折々考へちやア、遂鬱ぐんですよ。」
 と涙ぐんでゐる。

「お前は其れが悪いよ。何かを云ふと、直に心配を致ちやア、請らない事で氣を痛める、其の癖が一番に宜けない。笑顔は人の氣を晴らすと云ふから、些とは縹致は悪くても、完爾くしてゐると愛嬌があつて、人好がするものなんだから、彼方へ往ッたら、少しは氣

にかゝる事があつても、宅にゐるやうに鬱いで居てはなりませんよ。始終屈託顔を致して居ると、火が火を喚ぶの譬で、側の者まで可厭な気分になつて、途面白くないやうになります。能く／＼其の癖はあ

慎みなさいよ。』

と諭され、百合子は彌々泣き出しさうな色動かし、
「爾ですぬ阿母さん。ですけれどもね、私は恠いふ苦勞性ですから、遂鬱々まいと思ひつゝ、何か鳥渡致したことも氣にかゝつて、考へ込んで了ひますよ。此の悪い癖が、若しか彼方の氣に障つて、離縁にでもならないか知らず、其れが又苦勞になります。」
と堪へ堪へし涙は、何時しか膝にはら／＼とかゝりぬ。

第三回

鶴巻町の飛鳥が家にては、娘百合子が嫁入支度を取急ぎ、母親が若

かりし頃に着たる衣裳の中にて染返して役に立ちさうなるを紺屋に遣り、到底間に合ひかねる分は、賣り拂ひて、今の流行物を求むる補足に使ひ、小給の身の儘にならねば、子を思ふ親心の望みに比べ

ては、百分一にも當るまじけれど、兎も角、一通りの紋附、曠着、

不斷着まで調へ、長櫃は有合のにて間に合はせ、筒簞、針箱、要簞

等の果てまで、身分には些と過ぎたる程の支度なり。

季節の移目なるに、特に當春は氣候不順なればか、雨降る日は、綿

服の重着しても、尙火鉢戀しき程肌寒く、晴るれば袷惜しき空とな

るに、感冒の流行はげしく、家並に一人は必ずある位になりぬ。

百合子は彌々今半月暮せば、小石川小日向臺町なる、雀部が方に嫁

入の身と極まれるに、此所と彼處は僅十丁程の距離なれど、住み馴

れし地を離れねばならぬと思ふに、常には心も留めず見過せる、

早稲田々圃越に望む白白蠶の影色、何となく懐かしく、名残が惜しい

やうに思ふ。人の家の妻となりては、假令の道遙きも心に任せぬものなればと、百合子は庭の櫻の蕾ふくらみて、明朝まで氣の附かざりし枝に、三つ四つ五つ白きが見ゆる黄昏、生暖き風に吹かれて、母親と共に大隈邸の後より田圃道をぬけ、關口の川に添ひて、心靜に散歩を試み、其れより小石川の江戸川の櫻を眺めて歸りしことあり。此の夜より百合子は熱發して感胃の心地なりとて床に就しが、翌日より懊惱ますく烈しく、近所の醫者を招きて診察せしめたるに、少し性の悪き感胃なれば、軀を冷さぬやうにして服薬さへ怠らずば、兩三日中には屹度全快すべしと云ふに、一旦は安堵致たれど、此の診察は全く翦れ、熱度は彌々高まり、胸膈の邊微痛を覺ゆるやうになりぬ。少し氣がゝりになりて、神田の山龍堂に來診を請へるに、樫村氏の診察に依れば、正しく這は肋膜炎なりと云ふに家族の者痛く驚き、色々療治に手をつくしたれど、經過奈何にもよろしか

らず。拙々しく全快の見込みなければ、結婚の延期を先方に申込め、醫師の徳憑に従ひ母親附添ひにて、百合子は熱海に轉地療養することゝはなりぬ。

百合子は假初の感胃が因となりて、竟に肋膜炎に罹りしより、一刻程には烈しき苦惱は覺えぬやうになりたれど、今も尙胸の右側惡痒く、折々は微痛をも感じ、病後故か滿身癢え疲れて、氣分も何となく勝れず、陰氣なる稟性なれば、彌々物思ふこと多くなりぬ。

雀部に百合子を媒妁せしは、小石川水道町に住む、山瀬元と云へる世話好きなる醫師なりき。山瀬は雀部とは同郷と云ひ、特に幼き頃同じ寄宿舎の飯を共に食ひし交誼もありて、今も氣の合ふ所より無二の親友とも云はるべき間柄なり。されど山瀬が飛鳥家の方どの關係は、唯二三年以來、患者ある折々に往診したる爲、懇意になれりと云ふのみなり。

婚禮間際になりて、百合子が此の度の病氣に就きては、山瀬も一方ならず心を痛め、自分も深く意を用ひて診察したれど、病症の質中油断なり難きを知り、強ひて兩家に勧め、内科の名手と聞こえたる、山龍堂醫院院長樫村氏に治療を請はしめぬ。樫村氏も山瀬と同意見にて、肋膜炎と診断を下し、其れくの處方を與へ、此の病は動すれば、肺患に陥り易きものにて、一週間もしくは二週間の中に、手落なく治療せざれば、後に挽回しのならぬ患を遺す虞あるものなれば、看病は頗る慎重にすべしとの注意をも加へたり。飛鳥方にては醫師の指圖に従ひ、懇ろに扱ひたれど、病後の驅容易く平常に復するに到らず、何か他の病に變ぜしにはあらぬかと痛く案じ過ごして、竊に樫村氏に尋ねたるに、氏は小首を捻りて、今の所にては別に變症せりとも見えざれど、經過餘り宜しからぬ方なれば、此の後の事は何とも請合がたし。此の際温泉などのある所に轉地して、靜

に保養せしむるが得策なり、尙服藥は怠りなきやうにとて、處法箋をつくりて與へき。山瀬も此の說に賛成を表したれば、竟に母親附添ひにて箱根に轉地し、一月餘は彼處にて暮せり。百合子は知らぬ土地に長く居るは心細しとて、頻りに歸京を望むに、母親も病人の可厭がるを無理に引留ても却て悪しかるべしと考へ、特に家政向の方も氣掛かりになるのみならず、旅に居ては病人に取られても、萬事不自由のこのみ多ければ、寧ろ娘の望み通り自宅に歸りて、氣儘に保養さする方増しならんと思案を極め、四月下旬に百合子と共に早稻田の我が住居に歸れりき。家を出づる頃は彼岸櫻も尙漸く笑ひ始し程なりしに、今は一重は大方散りて、稍の青葉目に立ち、八重のみは眞盛を過ぎたれど、靦色の花にも尙見所は流石に残りぬ。百合子は身に病あればか、此の頃は狭き胸に物思ふこと多くなりて、寐られぬ儘に聽く、聲尙若き池

の蛙の遠く近く鳴く音に、透枕はなれて耳欲つる夜は、心牙えていよく、睡むられず。幾度か身悶して、右脇を下に臥し、或は左に寐返を打ち、終には仰向になるなど、種々に氣を揉めど、手の置き所にも困り果て、兎角に軀落着かず。左のみ苦しからねど、胸の痛みにのみ心掛かりて、何時これが全快して、待ち焦るゝ嫁入がなることぞと思へば、色々の面白からぬ事など胸に浮び、心細きこと譬へ難し。

「萬一したら、肺病ぢやあるまいか。」と百合子は自分の胸を抑へて、溜息致ながら不圖思ひぬ。是れと同時に悚然と總毛だつやうに覺えて、何とも云はれぬ悲き感じ、心の奥底まで衝き入るやうに浸ひ渡り、譯もなく涙は頬をつたひて流るゝ。

「若し肺病なら、奈何致やう。」と自問の答へをば尙得るに到らぬ中、疾風の雲を吹き送る如く、縁談の破るゝ事やら、我が身が骨と皮のみ遣りて、宛然骸骨のやうなる姿に變じたる幻影やら、息段々細くなりて、最期と知りし時の心持に、忽ち成つて了ふやら、我が墳墓に戀人の詣づる影の、哀れに立てるが見ゆるやうに思ふやら、唯一瞬間に斯かる限りなき想像降るが如くに浮びぬ。

月明に落花白き田面にや鳴く、蛙の聲も時に連れて長閑に喧囂からず。彼方にて朗清に鳴くと聞けば、此方にては滅ゆるやうに微に歌ふ。百合子は睡られぬ儘に枕に凭れて、耳を澄まして熟々と聞くに、暫時は妄念の苦みを忘れて心おのづから靜なるを覺えぬ。物越しに聞いてゐる中は、奈何飽しき形の虫かと思はるゝなれど、正躰を見れば誰も彼も遂巡すべき、醜き様なるは彼の蟲なれど、浮世の事の大概は、是れに近くはあるまいか。主人は始終蠅塗車を乘廻して、羽織、袴、持物に流行を追ひ、時計やら鎖やらに金を鏤め、其の妻なるは三重に縮緬の黒紋附、烏渡出るにも女中を右に書生左に、「こ

らや」と人を願で使ひまはし、見た目の立派さは、萬人に羨まるゝ身分の人も、家庭の内幕を窺いて見れば、苦しき事の多くして、白綾の手帛に涙の痕絶えぬもあり。雀部さんは彼のやうに優しきお方なれど、二年三年添うて見ての後でなくては、奈何いふ氣性が奥底の事は分らず。極善い人と善い人が一所になりても、氣が合はねば別れ話にもなる例もあるもの。縦し又彼の方だけは私をお氣に入つて大事に致して下されても、姑や子姑や親類の人達の氣に入らねば、是れも居憎くなる元にならう。萬事に心を附けて皆さんの機嫌を取るつもりなれど、一旦虫が好ぬとなれば、深切にすればする程、尙々可厭になるものだと云へば、此方の勤め様にもみ頼みを掛けて我が行末は測られず。縦令皆さんのお氣に入りて、可愛がるゝ身にならうども、此の病氣が再發するか、若し又肺病にでもなつたら、其れも不縁の基であらう。去らるゝ時の悲しさ、去られて後の物思ひを

考へて見れば、一疋弱な此の身を持ちて、何時奈何事になるまいものでもない。寧此の度の縁談は断つて了ふか。否々雀部さんは此方の心を御存じない故、奈何邪推をなすつて、他に男でもあるか、金持の口でもあつて、其れ故の破談と愛想づかしをなされぬとも限らず。爾ありては尙悔し。矢張運は天に任せて、素直に嫁入を致して、跡の事は其の時に又分別も出やうと、漸と胸を撫下しぬ。其れより、雀部が妻となりて後の事など思ひ浮べ、學校で習つた家政學の應用に心多忙しく、忽ち育児法の問題に移りて、此の研究に暫くは餘念なく、何時しか途睡に入りて、夢に抱く兒の顔雀部に生寫しなるも可笑し。翌朝九時頃より、例の情交好の絢子、病氣見舞にどて久濶にて尋ねて見え、一通りの挨拶形式の如く済まし、百合子が病室に通りて、幼稚き頃よりの友達なれば、云ふことに遠慮なく、色々の打開話も

途興に入りて、此の部屋には曾つてなき笑聲も聞こゆるやうになりぬ。

絢子は活々した眼元に少し笑ひを含み、

「あの、何で御座すつてね。雀部さんね、貴女の御病氣で、結婚が延びたもんだから、大變に氣を揉んで居らっしゃいますとさ。だけれども、尤う直に快くお成なさるんだから、結構だわ。」月は隈なきをのみ見るものかは。「てんでせう。散々御心配をなすつた後で、お貰ひになるんだから、尙の事屹度貴女を大事になさるに違ひないから宜いわ。」

と鬱いでゐる百合子の顔を、横の方から窺き込み、

「ね、嬉しいでせう。」

と獨で莞爾くしてゐる。

「だって、何時全快と癒くなるか、分りませんもの。」

と溜息を吹き、

「私はね、萬一か肺病になつたんぢや無らうかと、爾思つて心細くなつちまふの。苦勞性だもんですからね、宜けアしない。」

と又俯向いて鬱ぐ。
毛糸の被布かけたる、桐の鋏形脚の机に、百合子は後向に片膝かけて凭れ掛かり、古き赫繪の硯箱の裏に据たる、都鳥の形せる隅田燒の筆架を静に取りわけ、掌中に載せて意味もなく恍然と眺めて居る。側に坐れる絢子は話妙に途斷れて了へるに、取附けもない事も云はれねば、心に程宜い話題を索めながら、所在なさに百合子が物思ひに沈み居る様子を凝視と眺める。生際うるはしく面長なる顔の色、不斷も白き方なれど、今日はわけて頬の邊に曉方の色をほかし、透き徹る程潤澤なり。心柄か眼の下、圓などの肉少し落ちたる様なれど、眉のかゝり鼻の形、何れも可愛らしく、常に伏眼になる癖あり

て温厚なる中に魂の影、宛然に映る清きところ見え、形格好き受口常に少し開きて、白き齒の微見ゆるは、如何にも柔和き心の、彼處より覗かるゝやうにも思はる。黄糸の勝つた都錦仙に、襦袢の襟は紫根地に横雲を水色にぬきたるを掛け、米琉の書生羽織を着て居たり。

絢子は百合子が玩弄に致してある、都鳥に目をつけ、

「大層、可愛らしい物ぢやありませんか、其れは何方で、買って入らしたの。」

「是れですか、是れはね、向鳥へ梅見に往った時、百花園で買って来てよ。彼處で賣って居ましたの。」

「都鳥で御座いませう。風流ですことね。」

「爾でせうよ。」
静に絢子の手に渡して見せる。絢子は微笑みながら、

「是れは戴いて参りますよ。貴女が持つて居らしつちやア悪いわ。私には似合ふけれども……。」

「何故。」

「其れだつても、都鳥は寡鳥だと云ひますからさ。」

「あらッ。那麼ことを仰有る。貴女だつて、直に結婚をなさいませう。眞實に仰有いよ。寡鳥が似合ふなんて。」

と羞かしさうなる眼元に、少し笑ひを含んで睨める。此の鳥渡浮きかけた調子も、直に沈みて、百合子は復考へ込む。

「私ねえ、絢子さん、爾思ふことがあるわ。」

「何？」

「寧ねえ、雀部さんどね。」

と些と顔をばつとさして、俯向きながら、

「約束だけに致して置かれるもんなら、何時までも此の儘に致して置い

て、眞實の結婚は致す仕舞ひにしたいと思ひますのよ。」

「何故？、そんな事を仰有るの。」

「何故だつても。」

「貴女は一躰、奈何なすつたんですよ。大變に何だか、厭世家にお成んなすつちやつたことね。」

と絢子は洞然とした眼を一杯に開いて、百合子の萎れ返つて居る顔を正面に見詰める。

「別に厭世家てえ、譯ぢやないけれども、何時鹽梅が快くなるか、

分りませんもの、彼方の皆さんにも、其れが爲に色々御心配をおさせ申すでせう。自分でも又詰らない苦勞を餘計に致しますからさ。だもんですからね。」

と鳥渡考へ、

「寧破談にでも致して戴いたら、其方が却つて洒然するだらうかと爾

思ひますの。」

「何故、貴女は、爾お執拗なさるンですよ。」

と叱責めるやうに早口に云つて、晴々と笑つて居る。

「否、執拗やア致しませんけれども。」

「否、執拗て居らつちやるんだわ。百合子さん、其れは貴女悪いわ。

其れぢやア破談に致やうと、若しか彼方で仰有つたら、其れこそ貴

女は先ア奈何なさるの。」

百合子は答へに聞えて、唯もぢついで言葉なし。

「其れ御覽なさいなね。破談にならうもんなら、其れこそは、屹度

尙のこと御病氣が悪くなつて、命の危いやうに、成るに極まつて居

まさアね。其れはねえ、斯うやつて煩らつて居らつちやるから、氣

詰りで自然色々お考へなさるから、焦燥くなつたり、憤悶くなつた

り致して、寧止しちやつたら、霽々して宜からうなんて、お考へなさ

るのも、勿論無理ぢやアありませんけれども、華分船の障碍多いが人生の常態でせう。苦い皮の下に甘い實が匿れてゐるもんだって事を、何かで習ひましたぢやアありませんか。貴女に非常なる幸運を與へる前に、天が貴女を試みるのなんですよ。だから、確固なさいよ。少しばかりの苦痛に落膽なさるやうでは、大いなる幸福を授ける價値がないと、若しか天に見限られたら、奈何なさるの。貴女の手に一旦落ちた本尊を再び奪ひ返されるやうな事があつたら、大變ぢやありませんか。

絢子が熱心なる忠告に百合子も頗る動かされたらしく、

「眞實に爾ですわね。貴女の説は眞理だわ。耳朶を突通す痛さを忍ばなければ、寶石を飾ることが出来ないよと云ふ事が、修身の本にも御座いましたッけね。道徳病氣に罹かつたのも、將來幸福になる爲なのかも知れませぬね。其の積りで、私はね喜川さん、尤う決して心

配は致ないわ。」

「爾なさいよ。少しばかり煩ッたッて、貴女のやうに快々なさると云ふ事があるもんですかね。」

「一鉢私は弱虫なのねえ、喜川さん。」

百合子も漸く笑顔になりぬ。

二人は下女が運んで来た茶盆ひき寄せて、櫻餅を食などして、色々學校に居た時分の運動會の話から、試験の事、教師生徒の懷舊談など、時に時を移しながら、眺むる南開の庭の中央に古き池ありて、其の向ふの假山は、背面一帶の眞竹の林を負ひ、隅の方には朱塗にせる狹小き稻荷の宮立てり。直その側に老木の普賢櫻、今を盛期に咲き亂れ、枝もまなひて、散際の美觀いかばかりと、今より思ひ遣らる

絢子は件の櫻を惚々ど眺め入りて、

「マア、眞實に綺麗ですことね。是れが一時に散らうもんなら。お庭中が眞白になつて、宛然で初雪でも降つたやうでせうね。」

「爾で御座んすよ。彼のお山がお富士さま見たやうになりますの。其れに可笑う御座んすよ。鯉や何かい、食物だと思ふんで御座んすかね。パクリと口を開いちやア、瓣を食べちやア、又吐き出しますの。」

絢子は椽側に立ち出で、庭を其所彼處眺め廻し、暫時は柱に凭れて、假山の櫻に熟々見惚れ、聽て元の席に戻り、

「飛鳥さん、貴女ねえ、此の節は歌をお作りなさらん。」

「はア、些ども出来ませんの。先日ねえ、些と感じた事が御座いましたから、一つ作つて、田中先生ねえ、彼の方へ上げて添削を致して戴いたのがあるッ切りなんですよ。」

「奈何いふのなんです、其れは。」

「詰らないのなんで御座んすよ。」

「マア、聞かして頂戴な。」

「實に拙いの。お聞かせ申されな位なの。」

「宜いちやありませんか、仰有いよ。」

「だつても、耻かしいんですもの。餘り拙いんで御座んすからね。」

「宜いわ、親友に聞かせるんだもの、他人にちやあるまいし。」

「爾ねえ。彼の恚う云ふんで御座んすよ。『我れ死なば櫻木の根に埋めてよ、人や愛でまし、花になりなば。』てんです。詰まらないでせう。」

絢子は小聲で直に朗讀を致して見て、尙二三遍繰返して靜に考へ、

「實に私感じますね。妙いちやありませんか。是れが貴女の述懐なんで御座んすか。歌は實に結構なんですけれども、何だか今の若さに餘り心細い事を詠になるちやアありませんか。如何致して這麼淋

しい感じをお起しになるんでせうね。矢張何で御座んすね。煩ッて居らッしやるからなんだよ。」

「先、喜川さんお聞きなさいよ。恙うなのよ。私がね、四五日前には、奈何致たんで御座んすか。騙の具合も悪御座んしたしね。気分も其れに大變宜けなかつたでせう。其れで悪寒もしますから、床を敷いて臥ッて居ましたんでせう。するとね、何だか、不圖死にやアしまいか、なんて考へ出しましたの。其の時の心細かつた事は實に非常でしたよ。横になッてばかし居ても、退屈ですからね。枕に凭りかゝッちやア、『籠の座』や『初學び』や何かを引張出して、歌でも詠うと思ひましたの。些どもその時にやア出来ませんでしたの。其れから、止しちやッて又横になッて了ひましたのですね。其の次の日なんで御座んすよ。朝手沈をつかひに縁側へ出ますとね。彼の櫻は喫驚する位、唯一夜の中に咲いてるぢやありませんか。暫く私

見惚れて居ましたわ。其の時、不意と彼の歌の趣向を得たんで御座んすよ。全く何人が入らしッても、此の櫻ばかりは褒めて下さらない方はないんで御座いますよ。ですからね、若しか私が死んだら、此の木の下へ埋て貰ひたいものだと思ひますね。花にでもなッたら行末長く人に愛して貰へるだらうと、爾感じましたの。」

「人ての？何人？」

「誰レッてことアないわ。一般の人にでさアね。」

「嘘、雀部さんの事だわ。」

「喜川さん、可厭ねえ、爾ぢやアなくッてよ。」

「お厭しなすッても往けません。明確と推察で分りますよ。」

「全く私は、その積りで詠んだんぢやなくッてよ。」

「如何ですかね、怪しむべしだわ。」

「宜くツてよ。喜川さん、多度お苛責なさいよ。」
 「苛責ますともさ。歌でお惚話拜聴なんだもの。」
 「嘘だわ。お惚話ぢやなくツてよ、寧ろ泣言だわ。」
 「ですけれども、御注意の爲に爾云ツて置きますがね。雀部さんはね、梢の花よりも貴女のやうな高嶺が似合ふ花の方を愛しますとさ、オホ、。」
 絢子、百合子の二人が、睦まじく話して居る所へ、百合子の母親入り来たり、
 「喜川さん、今日は貴女が入らしツて、下すつたもんですから、此の娘は嬉しいと見えて、顔色も大變に何時もより加宜ござんすし、其れに何かお話を致したりなんぞして居る故か、気分も宜かりさうで、お蔭様で私迄喜んで居りますので御座んすよ。不届は實に尤う、始終鬱いばかり居ますから困り切るので御座います。」

絢子は少し席を退り讓ツて居住ひを直しながら、
 「其れは尤う、如何致しまして、お不快いで御座いますから、遂お鬱ぎなさいますで御座いますせう。」
 「私はねえ、貴嬢、それでは鹽梅を、尙のこと、悪くするばかりだから、と爾申しちやア、喧ましく云ふんで御座んすよ。ですけれども、恙う云ふ性分と見えて、直に又鬱いぢやア、詰らない何だかお老婆浸たことばかり申しちやア、私を困らしますんで御座んすよ。實に恐れ入りますすけれ共、貴嬢から能く爾仰有ツて戴いたら、と爾存じまして、亭主とも不断爾申して居りますので御座んすが。何卒ね、些とお小言を仰有ツて下さいよ。お頼み申しますよ、ね喜川さん。」
 絢子は笑ひながら、静に聞き終り、
 「爾で御座んすね。お鬱ぎなさるのはお軀に一番害になるので御座

いますからね。ねえ飛鳥さん。少し氣を大きくなすって、お鬱ぎな
さる事はお止しなさいよ。阿母さんが那麽に御心配なすって居らッ
しやるぢやアありませんか。」

「有難うよ喜川さん。貴嬢の御忠告に従ひますがね、如何致したんで
すか、自分でも鬱ぐのは詰らないと思ひつゝ、詰り癖なんですね。習
慣になつてるんですからね、遂悪いと知りつゝ、爾なッちまひますか
ら悔しう御座んすよ。」

「ですからさ、習慣なんでせう。習慣ならお氣をお附けなさりさへ
すれば、直らない事はありませんやね。」

「其れはね、爾でせうとは思ひますけれども……。」

「喜川さん、お聞きなすって下さいよ。恚うなんで御座んすよ。」
と母親は少し席を乗り出し、

「若しか肺病ぢやアなからうか、肺病になれア到底助かる見込みも
ないしする、疲せ衰へて血を吐いたりなんぞする、不潔しい様を人
様に見られるよりかも、若し彌々爾と極つたら身でも投げて死んぢ
まッた方が増した、なんて實に如何も馬鹿々々しいことを申しちや
ア、自分も泣き私達をまで泣かせますの。是れには眞實に困ります
よ。」

「だッて阿母さん、肺病のバチルスは傳染をするから、私の爲に側
まで飛だ災難にでも罹ると宜けないと考へて、其れで、私、爾思ひ
ましたわ。」

「幾等傳染するからッて、爾容易く傳染しますものかね。其れに北里
さんや何かの療治を受けますと、眞實の肺結核になりました方でも、
随分健康に恢復なされる人は、幾等も御座いますからね。縦しや肺
になつたからッて、爾心配をなさるにやア當りませんやね。其れに

貴嬢のは、尙中々肺なんて所にヤア、往ッてるんぢヤアありますまい。那樣にお氣をお揉みなさるのには、餘り心配が過るッてえもんですわ。氣から病と云ひますから、今些と心を活潑に持つて居らッしやいよ。」

百合子は無言で、身動きもせず、深い息をして耳傾けて居る。

「其れに憊うなんで御座いますよ。縦令ひ肺病にならなくッても、這麼可厭な病を持つてると聞いたら、雀部さんがお嫌になるだらうなど、又其れを苦勞に致して居ますの。實に此の娘のやうぢヤア、苦勞にも限がなくなりまさア、ねえ喜川さん。雀部さんは分らない方ぢやなし、病煩ひは生な軀を持つてゐる者には、誰れにだッてあるこッてすもの、爾容易く愛想を盡す事が御座いますものかね。爾ぢヤアありませんか、ねえ喜川さん。」

「爾で御座んすともさ。雀部さんだッて、何時御病氣にお成なさる

か知れませんが、那樣ことを兎や憊う、お思ひになる道理もありませんし、又た那樣薄情な方ぢヤアないのですから、御安心をなさ

第四回

關口邊の櫻は名残なく散り、門の柳の糸伸びて、其處彼處の青葉影多く成りぬ。されど百合子が病氣は拙々しく藥の効驗見えず。此の頃になりて、愈々咳すること烈しく、飴の如く濃き痰を咯くこと頻りなり。家族一同の心痛は云ふまでもなく、媒灼役の山瀬も特の外氣を揉み、足繁く訪ひ來たりて、主任醫もあることなれど、深切に診察して彼れ是れと注意に怠らず。

樫村、山瀬等の醫藥も効を奏するに到らず、兩親が懇ろなる看病も其の効驗なく、百合子が病は終に全く肺結核に陥りぬ。這は窃に樫

村より山瀬に略痰試験の結果、明かに若干の結核バチルス認め得たる由の報知ありしに依りて、今は疑ふべからざる事實とはなれり。山瀬は此の報告に驚き、直に飛鳥家に駈附け、左あらぬ態にて自ら百合子に痰を略かしめ、窃に家に持ち歸りて、顕微鏡に照し見るに、果して樫村氏が驗案に尠も違ふところなきを確め、失望實に一方ならざりき。

肺結核と雖も決して初期の中には、不治の病とは云ひ難けれど、何しろ容易に全癒し難き難症なることは争ひ得ねば、媒人たる義務として、特に餘所ならぬ省部が運命に關すること重大の事件なれば、手を束ねて知らぬ態にて居らるべきにあらず。二人とはなき親友が一生の運命の浮沈に拘はる話なれば、中々安閑と見過ごされたる義理でなし。且は身醫師といふ職分もあること故、奈何にしても此の始末を雀部に明白に語りて、當人の決心をも聞かねばならず。

唯眞狀を云ふだけの事なれば、何の雜作もなきことなれど、之れを聞かば彼れは奈何に失望するであらう。奈何に悲歎に沈むであらう。運命の非なるをも啣ち、悪縁を結ばせたる此の身をも定めし怨むであらう。怨まるゝは辭する所にあらねど、彼れが歎きを見る目は辛し。彼れも一個の男兒なれば、よもや女々しき愚痴は云はざるべけれど、無言の間に堪ゆる無限の懊惱、苦悶、それを見ること中々に心苦し。左りとて掩ひ切れることにもあらず。死期に臨んで顯はれなば、却て友誼にも戻り、人の怨を着るとも深かるべし。奈何致ても是は今の中に打開けて、破談にさせるより外致方なし、と心では決したれど、奈何やら雀部に合はす顔がないやうに思はれて、一兩日が程は、只管思案に迷ひ、愚圖々々と逡巡ひ居たり。

雀部にだけは是非事の實際を白状せねばならぬとしても、之れを飛鳥家夫婦の者に告げて、破談をして呉れ、と言ひ放つ程の勇氣は何

處を授けても自分にはないやうに思はれる。躰よく雀部が將來の禍
 ひを除く法さへつけば、寧ろ飛鳥の人々には肺病といふを飽まで包
 みて、檜村と自分だけ承知で適當の療治を及ぶだけ施して置きさへ
 すれば、別に不都合のなき譯なり。懃打開けて騒動になれば、自然
 病人も覺りて、爲に病勢を募らせ、死期を近からしむる虞も亦なき
 にあらず。此の方は緘黙を守るが上策なりと、其のことに極め、檜
 村へも書面を送りて、秘密に致し呉るゝやう頼み置きぬ。
 さて一方には明白に打開け、一方には飽くまで包むことまでの思案
 は定まりたれど、残る一つの困難は、奈何なる口實にて破談をすべ
 きかといふことなり。是れには順と分別に詰まりぬ。下手なことを
 云は、飛鳥家の感觸を悪くするのみならず、百合子の怨も受けぬ
 ばならず。否々、奈何な巧い口實を得たところにして、破談を申し
 込めば、屹度非常に先方では腹を立つに相違なからう。慣られるの

や憎まれるのは宜いとしても、可憐さうなるは彼の娘なり。一方な
 らず雀部に戀慕して居るさうであるが、一旦破約と聞かば、其の歎
 き、其の落膽、その悲しみが思ひ遣らるゝ。嗚呼嗟乎、自分が世話
 好の報酬で飛だ重荷を背負込まさるゝとになつたか、以來は決して、
 決して、怪我にも媒妁などはすまじきこと、山瀬は一人頭を惱まし
 し居たり。

百合子が結髪の方と云ふは、小石川小日向臺町に住む、陸軍歩兵大
 佐雀部徹が物領雀部明と云ふ男なり。明は幼稚き頃より武道よりは
 文事を好み、普通教育を卒へたる後、北米合衆國に留學し、數年間
 オークランドの州立大學に在りて、文學を修め、パチエーラ、チフ、
 アイッの學位を得て歸郷せるは遂去年の春なりき。
 其の後或高等の女學校並びに私立の英語學校に聘され、英文學の教
 授に従事せるが、天稟極めて温厚の君子ともいはるべき方なれば、

生徒に對するにも熱心と深切とを第一とせり。されば未若年ながらも淺からぬ人望を得て、評判特の外芽出たし。百合子の如きも雀部が教へゐたる女學校より出でたる卒業生の一人にて、又雀部の爲人を景慕せるの餘、戀せる者の一人なりき。絢子も亦その數には洩れずして、戀神が征矢にかゝりて、重傷を胸に負ひし者の中なりしか。

雀部の眞面目で、熱心で、正直なることは、殆ど側の目より見る時には、滑稽に類する程のことでも聞々ある位なり。彼れは同僚の教師等が喋々と恐にも附かぬ浮世話やら、手柄話やら、女の噂やらに口角泡を飛ばす間にありても、靜に腕を拭いて、少し反身に椅子に凭かゝりし儘、身動きもせず何事かを一人黙考して、傍に人なきが如し。同僚の口輕男某が、雀部が椅子に凭れて常に黙考してゐる狀を嘲り、「彼れは舶來のお寶頭盧様である。」と云へり。此の男時々駄洒

落などを持ちかけて、雀部を醜弄しやうと試むることあれど、彼方にては洒落に註釋が附かぬまでは、一向に通ぜざる故、この口輕も大方は疲れ果て、自分の方から閉口するが厭々なり。

「雀部君、奈何致さんだい。妙う師走の蛙をきめて居るぢやないか。」と揶揄へば、雀部は靜に衣袋から手をぬいて、勿躰らして眼鏡を脱し、一拭ひして掛け直し、其れより恭々しく其の「師走の蛙とは何ぞや。」の問を起す。對手は致方なきまゝ、洒落の直譯を口授すれば、始めて少し苦笑ひをして、

「那樣ことは、文士の、否、學者の口にすべきものではないね。奈何となれば、君の今云つた言葉を試みに今修辭學的に評すれば、極めて劣等なる地口の類に屬するものである……。」

と是れから、醇々と詞姿の講釋が始まる。其れより一轉して、人は各々その長所を利用するのが個人の爲にも將社會の爲にも有益で

ある、話術に長じてゐる君の如きは、須く快辯を揮つて人を喜ばし
て可なりぢや、が僕の方は寧ろ諸君の談話より或物を發見する方が
自ら得意とする所であるから、聴手の方に廻つてゐるのである。且
人は尤も己と意氣相投じた者と、語ることを好むものである。然る
に僕は先づ自分の心より自分と最も意氣の相吻合してゐるものを見
出ださないと思ふのであるから、竊に自分は我が心と語つてゐるの
である。故に君等は僕を緘黙家だといふが、其れは皮相の見で、寧
ろ僕が一番多辯であるのかも知れん。君等のは唯空気に波動を興へ
てゐるに止まるのかも知れん、と他の嘲馬を眞面目に解いたことも
あり。此の説を鳥渡聞くと、反抗して、皮肉を云つたものと取られ
るに違ひないが、雀部の心では一向その氣ではなく、聞く者と話す
ものとの心と心とが程よく調和してゐれば、幾等饒舌をしても耳の
戸口で消えて了ふものだ、と信じてゐるからで、決して他の談話の

價值奈何を評したのではなかつたのだ、と跡で或神經家の問ひに答
へたことがある。

雀部明が説に據れば、人は外國より来る自然の影響に動かされるの
みで、特に我が手を以て我が心を教育する事が出来なければ、動植
物と進むところはな、其れでは靈性を具へた人間の價値は認め難
くなる譯である。詰り自修をして進んで往くところに、人間の眞
價がある。或一定の理想を立て、飽までも其れに近寄らうとして、
百難を排して、足搖腕いて勇往するところが人間の生命でもあり、
文明の精髓にもなる所のものである、と爾云つてゐる。
明は此の簡明で、而も極めて單純なる主義を抱きあるものなれど、
之れを實地みづから履行してゆく所を見れば、頗る嚴格にして、頗
る縝密なりとの感じを人に與へるだけの事は、確に認められる。
明は反省録といふものを造りて、毎日寢室に入る前には、自分が一

日中の行為、課業、思想、感情に對する嚴密なる批評を加へて、公平なる試験係の如く、假借なく少しにても失行邪念などの形迹を認めれば、罰點をくだして、改悛の誓を心に立て、然る後に靜に睡るを習慣の如くに守りぬ。

彼れは言行に顯すには到らずして、唯心の中に、正當の理由なきに他を憎怨し、若くは嫌疑などをかけ、自分の所思の誤謬を覺りし時などには、火事場に赴くが如くに、周章て、其の人を訪ひ、鄭重に謝罪するが常なりし。されば、明の性質を知らぬ者は、徒らに直を街ふ奇矯の人物として、寧ろ嘲笑ひある向もありしと加。

彼れは友人に誘はれて、宴會などに臨むこともあれど、決して酒を飲みしことなし、藝者が雀部の前に來て、

「貴郎や。召しかがれ、子々が湧きますよ。」

と嬌艶しい聲で云つても、

「否、僕は飲まんよ。僕は酒は嫌ひぢやから、酌はせんでも宜い。」と極めて、眞面目に断つて了ふ。

されど、雀部は決して血も涙もない無情漢にはあらず。友愛の情にも厚く、人の窮を救ひ、人の苦しみを憫み、深く他に同情を表して之れを慰めて遣る事を好むは殆ど常人の及ばぬ程なり。されば友人の中に戀の爲に煩悶するものありて、他人は之れを面白半分に見ふ折などには、希臘の獨立軍の援なきを憫めるバイロンの如く、非常の熱誠を以て其の人の爲に辯じ、其の人を庇護するに力めると云ふ奇癖あり。何か力足らずして冤罪の爲に泣くもの、話など聞く時には、彼れは自分の身に降りかゝれる事のやうに、同情の念を燃して、人目も服はず、滂沱と涙を灑すこともありき。

雀部明には種々の特色あざれも、中にも人を尤も驚かすものは、彼れが苦業主義の實行家たることなり。彼れは冷水浴の健康に益ある

を知りて後は、如何なる冬の真中にも井戸端へ駈け出で、全裸体になりて冷水を釣瓶にて五つ六つ浴びることを怠らず。運動の不充分は體力を微弱にするものなりとて、雨風の荒き夜に二里三里の遠方より歸るにも、車を撥斥けて曾て乗りしことなし。日曜日毎には、必ず草鞋がけにて近郊に遠足を試み、體力の鍛錬と田舎の平和なる生活の觀察とをかね、自然の美に都門の紅塵に穢れたる膈をも洗らひ、小兒の如く終日無心の清遊に耽り、雀色時に家に歸るが習慣なりき。

友人などが事の意の如くならざるを啣つに遇へば、明は常に感めて云ふ。一時の不遇を見て、徒らに悶々するのは短慮である。年中咲續いてゐる花もなければ、夜毎に團々な月の出る國もない。自家一生涯に爲すべき務めと立つべき地位をさへ心得て、浮氣を起さずに、眞一文字に進んで往く堅忍不拔の氣象を無なしさへ致なければ、登

坂の次には降坂が来る。山を越えて了へば野に出るに極まつて居るから、左のみ氣を揉むべきではなからう。唯君に云つて置くが、事を成すの秘訣は、其の事を愛すること我が戀人に於けるが如くするのである。古人も云つてあるが、戀ふる者の缺點は、愛の眞珠を以て填めて一層美にするものだと云ふ位で、一旦自分の主義なり事業なりを非常に愛しさへすれば、八方から出て来る障礙は、寧ろ其の事業や其の主義に愈々歴史的價値を加へてゆく資料になつて了ふのである。世の中の弱虫は肥料だけを遣つて、收穫を取らずに見限つて了ふものが多いから、辛苦も、失敗も、唯辛苦失敗たるのみで終るのであるが、些と極端な例ではあるけれども、縦令罪惡であつても、罪惡を罪惡として埋葬らないで、其の中に含んでゐる大いなる教訓を拾ひ出して来る程の時間と腕さへあれば、罪惡と雖も中々馬鹿にはならない。矧んや他の遺損ひや何かは、一生の上より勘

定すれば、皆將來美菓を得べき、肥料であるのは知れ切ッてゐる。一波瀾の間に心を没却して了ふのは男子の意氣ぢやアない。乗り出したからには漕ぎ往ける所まで帆を張ッて、港に着いてからの事である。利害の打算や、何かをするのは。無論その航路の方針は、始めより一生變へないだけの熟考は必要であるが、と憚う云ッて諭すのが、彼れが得意の論法なり。

「憚かる説は友人の爲にのみ假に設けたるものか」と云ふに、彼れ自らも深く斯く信じて居るものと見ゆ。

「貴君は近眼で居らつしやるから、何かに御不自由でせうな。」

と云ふ者あれば、彼れは極めて眞面目に、

「否、決して不自由などは思はんですな。何故か」と云ふに、私は無闇に方々を眺めるのは嫌ひです。且必要も感じない。私は遠くを見るの明を有しないのを悔しいとは思ひません。吾人の研究すべき

問題は天の星よりも、山上の雲よりも、自分に足元に多いのであつて、其れが又一番大切なのである。即ち自分を先づ眞先に考へねばならぬ。此の地上に奈何にして立つべきかを思索せねばならぬのである。且又近眼は實に潜心讀書するに最も適して居る。天は丁度程よく其の人の志望に協ふやうに致してあると思ふですな。」

と答へる。

彼れは何方かといへば訥辯の組に入るべき者なれど、却て彼れは之れを得意にしてゐる。彼れは常に憚う云ッてゐる。

「お饒舌の妙い奴は輕躁しい車夫を備ッて置くやうな者であつて、旦那の乗らない中に、ずん／＼空車を挽いていッて了ふやうなものだ。左もなくとも、途中で顛覆されたり、抛出されたりする危険がある。思想は我れに於て主人公である。主人公に關はず、どん／＼駈け出すやうな家來は、如何に健脚でも快速でも惜しくはない。其

所で自分は寧ろ遅鈍くとも従順な驢馬の方を選むのである。訥辯は自分のやうな考へた上でなくては、一言も物を云へないものには丁度よく適してゐる。恰も驢馬のやうに、自分の操る手綱に能く従つて徐々と歩き出す、決して自分を大泥溝へ抛出すやうなことはないから。

明が癖の中にて、一番可笑く思はれるのは、不思議に詰らぬ石でも何でも些と妙な形を致してゐるのを見れば、大喜びで拾つて歸ることなり。日外、學校の運動會で小金井に往きし時に、路傍で瓢箪の形せる緑色の石を見附け、例の如く劇く喜び、生徒の風呂敷を借つて、洋服の上に背負たるには、誰れも彼も抱腹せりとか。其の石は中々の重量にて、流石の明も額よりたら／＼汗を流し、伝々呻りながら、家に持ち歸りし時の極めて滑稽なる姿は、今も人の眠に殘りて、話の種とはなりぬ。

第五回

山瀬が雀部に百合子を灼媒てるは、全く親友に良妻を得せしめたま念に外ならざりき。百合子の溫柔なるどころと雀部の嚴格なる性質とは、陰陽和合の理で、必ず平和なる家庭を組織するに適してゐると信ぜるが故なりき。勿論、天稟の世話好といふ事も、幾等か手傳つてゐるに相違はなけれど、色々人の知らぬ入費を致たり、氣苦勞を致したりするのは、中々唯の道樂や、お禮惜しさ位では出來得べきことにあらず。全く此の度の世話焼は友愛の情から出た幹旋なれど、百合子が肺病に成つて見れば、何とやら破罽の入つた陶器をお辨茶羅で欺罔して、賣り込んだと云ふ趣のなきにしもあらず。如何にも雀部に對して面目次第のない話だ、と山瀬になつて見れば歎息を致すには居られぬ。又百合子の方に對しても雀部の如き今時にない謹

嚴家で、而も人情に厚い其人を持ッたらば、彼の娘の仕合せであら
 う、と思ひたればこそその周旋なりき。されど破談と云ふ一條になれ
 ば、何とやら夜店の草花を索見して、洒落に價を附け、直に袖を拂
 ヲツて逃出して丁ふやうなる状あり、と云へば云はるゝ理窟なれば、
 必ず人を翫弄にせりとの怨は免れ難かるべし。何方向いても、此の
 度は頗る心苦しく、迷惑なる役廻をせねばならず、と不斷活潑の山
 瀬も、二三日以來は例の豪放な調子の笑聲も立てぬやうになりぬ。
 今日、彌々頭斬らるゝ思ひにて、山瀬は日曜を幸、雀部が家を訪ひ
 ぬ。破談の一件胸に問えてあれば、雀部主人夫婦に時候の挨拶を述
 べるのすらも、何となく氣怏れして、何時もの調子と變はれるは自
 分にも知られたり。主人徹を始め細君まで口を揃へ先頃より悴が嫁
 一條に就いて、色々御心配をかけました、お禮は言葉にも盡くされ
 ませぬ、先方の病氣さへ快くなりますれば、直に婚禮の運びに至し

たう御座ります。何分此の後もお骨折をお願い申しますと云ふに、
 山瀬は如何挨拶をして宜いやら心惑ひて、額に流るゝ汗拭ながら、
 否尤う、御丁寧な御挨拶で恐れ入ります。此の位のことお骨折など
 と申す程のもんぢや御座いませぬ、決して御心配は下さいますな、
 唯困りましたは百合子さんの御病氣ですが、と云ひかけて言ひ淀み、
 思ひ直して、否その中には直りませうが、と苦しい所を一寸遁れて、
 獨窈かに胸を躍らす。
 先づ何よりか明君に遇ッて、開襟話をした上で、又改めて主人夫婦
 にも如何やうとも相談もなる事と、口を切るが辛さに、明が部屋に
 案内請ひて通りぬ。明は唐木の机に凭りかゝりて、テニソン全集の
 中、『罪業の夢』を繙きみる所なり。明は山瀬の入り來れるを見て、
 机を離れて此方向き、島渡會釋し、
 「いや、近頃は如何したい君、今君が來て居ると云ふから、出て往

かうと思つて居つた所だが、阿爺や何かに話をして居るだらうと思つて、迎への来るまで控えて居たんだ。」

「爾かい、頻に横文字勉強だね。」

「呎、これか、何、學校の下讀なんだ。教場で狼狽かないやうにと思つてね。狼狽く分にやア、尙好いが、大いに後進をわやまるからね。」

「君は何處までも眞地目だね。竹村なんざア、唯生徒を威嚇すばかりで、其れで大變に學校の受けが宜いと云ふぢやないか。」

「其れは爾かも知れんよ。僕は能く實際を見聞したことがないから、輕々しく彼の人を評定する資格はないがね。だが、教師は落話家や講釋師ぢやないから、人氣だの、評判だのは問ふの必要はない。生徒に諛ふやうぢやア、宜かんと思ふね。出来るだけ調べて、充分會得させるやうに、深切に講義するのが、正當だらうと思ふね。」

「君の議論は頗ぶる背癢に中れりだ。併かし、今の教師は腰に彈力あり、鼻下に髯あり、口に蜜ある奴が、一番成功するさうぢやないか。」

「だがね、其の成功の意味を聞かんければ、何とも云へはせんが……。」

「無論それは、衆愚に重んぜられる意味さ。所謂學校商賣の側でなんだがね。」

「呎、爾かい。其れなら勿論、爾なんだらうよ。併人は義務の爲に働くので、人氣取の爲に稼ぐのではないから、僕なぞは遣るだけ遣つて、跡は一向關やアせんよ。」

此のやうなる話の中に、山瀬は百合子が肺病になれる事を今言ひ出さうか、出さうか、と絶えず機會を覗つてゐたれど、氣の毒さが先きに立ちて、遂云ひそびれ、心ならずも教授論に釣り込まれて居る

中、又た今日此所へ来た用談のことが胸に浮び、左も云出し憎さうに、

「君、先達から、来やうと思つて居つてたがね、實はね、其の何でね……。」

「随分君も多忙だらう。」

「否、家業の方の事ぢやないんだ。實はね、百合子さんの病氣ね、其の病氣が、何だからね……。」

「又云ひ淀む。」

「何、既に約束が済んでるのなんだから、別に急ぐこともありやアせんよ。」

山瀬は形を改めて膝摺寄せ、何時もの輕快洒脱の調子には似ず、頗る重くろしき口振にて、

「甚だ言ひ出しにくい次第だがね、君。その百合子さんの病氣に就

いて、非常に困つた事が、出来して了つたよ。」

と指の股に挟んだ卷蓑を煙草盆の灰に烏渡さし込んで、俯向きながら腕拱く。

「フム、一躰それは奈何したんだ。」

「百合子さんの喀痰試験の結果、若干の結核バチルスを認め得たといふ報告を、僕が遂兩三日前に樫村から得たんだ。驚いて駆けつけ

て、實地僕も試験をして見たがね、肺結核たる徴證は充分なんだね。勿論、年は若いし、尙初期ではあるから、決して恢復の見込のない

譯ぢやないんだが、何しろ彼の病氣は難治の病症には違ひないんだから、一つ君の意見も聞いて、結婚一條も奈何にかせにやならん

思つて、其れで今日来たんだがね……。」

「爾か。」

と云ひしのみ。深く考へに沈める如く、眼を閉ぢて口を結びぬ。山瀬は明が落膽の様子を見るにつけ、愈々氣の毒になりて、何と跡を繼いだものかと、途方に暮るゝばかりなれど、今は黙して止み難しと心を極め、

「實に僕に先見の明がない爲に、斯くの如く悲しむべき縁談を君に持ち込んだのは、何とも謝するに言葉なしぢやが、全く君へ彼の話しした頃は、健康体に相違なかつたのなんだから、赦して貰はんけれど、アならんが、奈何にも賈物を賣附けた状で、實に面目次第のない話さ。事茲に到ればだ、致し方はない、遺憾ながら僕から奇麗に先方へ破談を申込んで、君に後の煩ひをかけないやうにするより、致方がないと思ふんだ。」

明は尙黙して下を向きしまゝ、唯溜息を呟いて居る。

「ねえ君、頗る遺憾ぢやアあるが、破談をするより外、仕様はないぢやアないか。」

「先ア些と待つて呉れ給へ、熟考するから。」

「爾かい。」

と山瀬は手持不沙汰に、言葉を退いて、控えながら庭を懶げに眺める。西洋風の植込の彼方に、藤棚の花房色づき染めて、風にゆらめくを暫時凝目と見詰め、間隙に卷簾を矢鱈に吹かして、答へは奈何にと待つ。明は靜に頭を掻げ、

「山瀬君？」

「えッ。」

「今の話ね。両親は何といふか知らんが、僕だけは破談にするに忍びんね。肺病になつたからと云つて、此の縁談を破るのは、人情として僕には到底出来んよ。」

山瀬は、明か答の頗る意外なるに、怪訝な顔色で、眼を一杯に見張

ツて、

「だがね、君。肺結核の婦人を貰って、奈何するんだい。」

明は、極めて沈着き拂って、
「奈何て、唯僕の妻にして置くのさ。」

山瀬は少し眉を顰め、
「妻にするは宜いが、彼の病氣は君も實例で能く知てるだらうが、

患者の十に對する七八分までは、天然の壽を全うする奴はないから

な。ツベルクリンなどを僕なども用ひて見るが、全治證を與へて一

旦退院さしても、少し攝生が悪いか、氣候の變化が激烈であると

か、營養が不充分だとかすると、忽ち再發して了って、遂に其の寂

滅爲樂てな事になりたがるからな。」

「勿論肺結核は不治の病であると、僕も信じて居るさ。併かし、不

治の病に罹れりと云ふことが、離婚の理由にはならんもんだと思ふ

ね。」

「議論は爾でも、何時死ぬか知れぬものを貰ったって、困るぢやア

ないか。」

「それは困る。困ったって、其れは決して離婚の理由にはならんね。

我が輩の倫理説から見ると、決して破談すべき條件が具備してゐな

い。何故かと云ふに、疾病は決して直に罪とすることは出来ない。

縦し或疾病は罪かも知らんが、都ての疾病を罪であるとは我輩は思

ふことは出来ん。縦令その結果から見れば、或は道徳上罪と看做す

べきものも随分ある。併し眞の罪、無罪は其の動作の意志奈何と問

ふ。即ち原機の善惡奈何を問はねばならん。然るにだ、宜ろしいか
君。今疾病は縦し結果から見ても罪惡にもせよ、決して意識的の自招
自致ぢやアない。断じてない。自殺などは此の限にあらざだが。志
て見ればだ、何うしても原機は少くとも惡にあらざと云はざるべか

らず、ぢやアないか。」
 と熱心に論じかける、勢中々鋭し。山瀬は微笑しながら聞き、折々
 啄を挿まうとすれども、隙のなさに控へて居たるが、鳥渡明が言葉
 の途切目へ衝込みぬ。
 「先ア宜いよ。議論は君の方の受持として、私は又、私の専門の方
 で云ふが、語を強めて云へばだよ君。百合子さんは、早晚死ぬもの
 と云はんければならんぜ、其れでも宜いのか。」

「死んでも宜しいとも。」

「ちやア、早いお話がだぜ、幽霊を妻にするんだぜ。私は狐の嫁入
 てえのは聞いて居るが、幽霊の嫁入てえのァ……、是れア餘り妙過
 ぎらアぬ。」

と山瀬は眉間に皺を寄せて、些と反身になつて、呆れたと云ふ容態
 をする。明は嚴然として形を改め、

「幽霊でも宜いちやアないか、一人人間は都て半幽霊と云つて可な
 りだ。何故かど云ふに、可死者であつて、不死者でないからである。
 僕が彼の女を貰ふ決心になつた時は、決して不死者として價踏をし
 たのでは元來ないんだ。」

「其れア爾だけれども、何しろ君も少し考へて見給へ、一家の細君
 どなれ、姑舅の世話も致して遣らなくツちやアなるまいし、下女や
 書生の指圖もするだらう。臺所の取締やら、徑濟上の監督やら、其
 れに子が出来れば、子の教育といふ重任もある。世間の交際もあら
 うてもんだよ。其れに君の御機嫌を取るばかりでも、確に非常な重
 荷に違ひないや。私のやうに、目端が利いて、察しが敏くつて、女
 の子に思ひ遣りがあつてさ、其れで同情が深く居てせえ、折々
 細君に、『御無理などを仰有るな。』てなことで、劇く怨まれることが
 ある位なんだから、君の如き、穴居の民に近い人物がよ。君のやう

に、野暮の精製が凝結して、出来あがッてるてな人物がよ、其れア尤う、實に細君たる者の世話の焼けさ加減でのア、なからうと思ふ。爾いふ人物でありながらだ、幽霊の細君で結構で御座いますなんての、實に罵倒にだも假しない。實に驚くべき空論であると云はんけれアならんよ。鳥渡考へても見給へ。腰から下のない、お負けに眞着な細君が、經帷子へ襷掛なんてえ姿は、餘り可笑くない圖ぢやないか、君も實に學者に似合はん近頃實に話せないね。」

と山瀬は堪らへかねて、得意の辨を揮ッて、頭からびし／＼と扱下せるに、明も些と矢所を衝かれて敗北の軀著るく、口を出さうとしでは、直に躊躇ひ、急には言葉の返し難くてか、俯向きて考へに沈む。

頭うなだれて、黙考して居た明は、靜に顔を上げて、山瀬の方に向き直り、

「ぢやア、君に問ふがね。若し僕と結婚後、十年たッてから、妻が單に肺病に罹ッたばかりの理由で、突然離縁をするとすれば、奈何だらう。不人情ぢやあるまいか。」

「其れア、無論不人情であるが、其の場合と此の場合とは、非常に違はアね。」

「更に君に問ふがね。若し三年の後ならば、奈何だ。矢張不人情だらう。」

「爾さ。勿論。」

「ぢやア、結婚の式をあげた翌日に、爾いふことがあッたら、奈何だ。論理上、これも等しく、不人情だらう。」

「マア待ち給へ。」

明は他を押接けるやうな身振と語勢で、

「否。先づ僕の説を盡さして呉れ。縱令一日添うても、唯肺病だか

らッて、追出すのは人情の上から云ッて、實に忍びんだらう。本來人間は必死者であるから、死期の遅速はあるが、死は始めより肯定して居ねばならぬのだ。随ッて病の如きも亦然りぢや。」

「それア爾いふ氣味もなきにしもあらずだ、が、君のは尙結婚が充分成立ッて居ないのなんだから、大きに、其所に、趣の異るところがあるよ。」

「否。些ども異りはせんね。形式的の飾や、儀式には、重きを置く價値は元來ありはせん。既に互に彼は妻なり我は夫であるといふことを、雙方の心で極めてある以上は、儀式の奈何は兎も角も、精神上の結合は成立ッてゐるので、此の類は永久解くべからざるものだ。詰り心の上に刻み附けられて了ふのである。然るに唯約束ばかりだから宜いと云ふので、破談にすることになれば、先方の心の此の深い傷は、百年癒ゆることなしに、放擲される譯になる。残忍この上

もない事だと僕は信ずるね。ね君、爾ぢやアないか。」

「マア君、待ちたまへ。爾理窟ッばく出られると困るが、世の中の事は理窟ばかりぢや往かんよ。此の複雑なる人事は、爾一理を以て容易く切り捌けるものぢやないんだ。先ア些と實際のことを考へて見たまへ。妻を迎へると云ふ趣意は、家政の監理者に致やうと云ふ爲でもあらうし、我が心の慰藉者を得やうといふ點もあらう。血統を斷絶させんといふ理由もあるだらう。然るに肺病患者であッて見れば、悉く此等の趣意に背いてゐるぢやアないか。利害の打算ばかりに泥む手合にも困るが、君のやうに空理に醉ふのにも實に困る。第一病人を宅へ入れたッて、仕様がないうぢやアないか。唯厄介な目を見るばかりぢやアないか。其れによ、些とア兩親の迷惑も察して遣り給へ。君の如き偏人には我輩の如き大々的名醫も、一驚を喫して、匙を投げざるを得ないね。實に呆れるぢやないか。」

「いや。君は宜かん。全で我輩と立脚點が違つて居るから駄目だ。君は實利の立地から云つてるので、僕は人情の側から説をなしてゐるんだ。であるから、此の問題は、實利と人情の取捨選擇奈何といふ事になる。僕は飽迄も人情の爲には、一生の幸福も利益も犠牲にする積なんだ。君とは根本の思想が違つて居るから、是れア議論にやアならんよ。友人として君の赤誠も忠言も充分僕は知つて居る。其の志は實に感謝するが、到底、破談説には同意することは出来んね。」

山瀬は口髭を捻つて、微笑しながら、

「何にも、爾、凝固るにも、當らんぢやアないか。女早魁のする世界ぢや無しよ。百合子さんで無くツちやア、夜も日も明けないでもなからう。先ア私に任せ給へ。標致望みとあらば、金魚落雁の艶な奴で桐の箱入になつて、吉野紙に巻んであると云ふ、風味の旨い秘

藏も周旋しやうしさ。學者風のがお望みとあれば、金縁の眼鏡をひけら加して、佛蘭西言葉で痴話れる奴も媒介たうし、乃至はぐつと碎けて、堅くツて野暮でなく、粹であつて而かも俗ならず、仕事は勿論、鳥渡蔬菜料理や何にかも器用に出来て、茶は仙家で、花は池の坊で、川柳めいた發句の一つも吐つて、藝事にも暗からず、地に長唄があつて、鳥渡流行物を弾かせても拙くはなく、踊は花柳で充分仕込んであつて、應對から言語まで、萬事志とやかであるのが宜い

とあれば、其れも見附て上げやうぢやないか。何も爾、やつに限るてえこともなからう。襟度は須く海の如くなるべしだ。」

明は屈み込んで、殆ど泣き出しさうなる顔色にで、山瀬の説を聞いて居るのやら、居ないのやら、唯々吐息を嚙きながら、無言で鬱いでゐる。

山瀬は尙も笑ひながら、ザツと側へ寄つて、

「マア、奈何したんだら。」
と明の肩をポント一つ敲き、

「眠り仕給へ。私は悪い事は云はんよ。實も大概の所に致して置き給へ。度といふ事は何にも、一番大事なんだ。藥の變じて、毒となるのも其所だ。實も餘り有り過ぎると、却て身を害して、お負けに、人にまで迷惑をかける事にならね。」

明は奈何にも、俯げなる眼色にて、まぢりく山瀬の顔を見詰め、
「君の深切は、僕も實に感謝するよ。併し、君の誠には奈何しても服し難いね。君は利害には敏いが、人の情の奈何に苦しきか、奈何に切なるかをば、一向察して呉れんから困る。」

「其れア宜かん。決して察せんことはない。大いに察してるんだ。君の方は、一瞬時の人情論者であつて、私の方は、五十年の上から見た人情論者なんだ。君の方は云は、近眼の情を説くので、私は遠

近併せ見る、千里眼的の情を主として云つてるのだ。」

「何故？」

「何故つて、爾ぢやないか。今君は百合子さんを可憐さうだと思つて、妻君にして見給へ。其れア彼の様子ぢやア、同棲する運びにも往くまいが、假に君の宅へ連れて來られると致して見給へ。嫁たるものが、來匆匆病氣で居た日にヤア、側への心配は何位だと思ふ。居るものも辛し、置くものは尙困る。其れでよ、幾等君が實情家であつても、何の役にも立たないで、金ばかり食ふ、可憐な、陰氣な、人に不快の感を與へる鬱きの蟲を脊負込んで、是れが二年三年と立つ中には、幾等か厭氣も崩さアね。又愛想も少しは自然つきる道理だ。其れを世間への牀裁や我慢で以つて、引留めて置く段になるとすれば、雙方の苦悶は奈何だと思ふ。今多少の情を忍んで、洒然と破談にするの比ぢやアあるまい。其れに子が出来れア、子にも傳染

する。百年の思を成すものなんだ。君は目下の愛を愛としてゐるが、私の方は、百年の思を思ひて、忠告するのなんだ。」

明は堅く口を結びて、一言の答へもなし。

第六回

明は飽まで破談説に反對して、假令百合子は肺病の爲に斃るゝまで、一旦結びたる約束は解くに忍びずとて、兩親の諭しも、友人の諫めも、悉く撥けて用ひざりき。今死に瀕して居るとすれば、尙のこと解約は情に背く、利己の沙汰なりとて、頑として聞かず。彼れが葬式料を吝まねばならぬ程に、我が家貧ならば致方なし、又今我妻なくしては、家政を維持し難くば、急に新しき縁を求むるの必要もあらん。併しながら今雀部の家には然ることなし。されば道に背き約に悖りて息ある中に百合子が情を生理にして了ふ如き、殘忍

な事をすべき理由もなし。又那樣無情な舉動を、人として出来る譯のものでない、と涙を流して痛論する。死しての後ならば、他に眞縁を求むることもすべけれど、彼れが世にある間は、決して恚る強面ことはすまじと堅く心に誓ひしとて、明は少しも動く氣色とてはあざざりき。

五月雨そぼ降りて、軒の雨の忙しく、面白く、其の音に一種の調子ありて、早言なる人の何事をか眩くやうに聞こゆるに、四方を締め、靜かに書齋の中に閉籠り居る明は、開ける書の上に顔は向けながら、臆を何處に注ぐともなく、恍然として現世の外を眺むる状なり。

心に言ふべからざる淋しさを感じて、机を倒るゝやうに離れ、其の儘手枕をして横になり、暫時は眼を閉ぢて考へに沈み居るらし。忽ちむくくと起き上がり、側方の書棚の上より寫眞帖を取卸して、

徐ろに繰りゆく中、百合子が七分身の姿に眼留まりぬ。瞬もせず見詰める明が胸には霞の如く悲哀の氣蔽ひかゝれり。考ふるともなく、百合子が病床の状目に浮びて、衰せ瘦へたれども、元來美なる容貌の愈々色白く、光澤うるはしくなりて、兩の頬ほ心のりと色附き、健康なりし頃よりも、一段見増りのせらるゝ面影は、數日前見舞に往きし時の現を直の幻影なり。

「奈何しても、彼は尤う、遠からず死ぬんだな。」

と獨語して、又改めて寫眞取りあげて熟々と見れば、百合子が眼にも永別の涙あるやうに見ゆ。此方の眼の曇なるべし。

忽ち明は自分は運命に奇遇まるゝやうに、生まれて來たのであらうかと一度は呷ち、直否々、爾ではないと心で自ら取消して丁ふ。人は愛する者の上に、危篤の病あるか、又は戀人を失へる時程に、我が心の奥底の響を聞き得る場合はないものである。最も人生の秘機

を窺ふに適する機會は、慙る時より外にはなし。詰り心の塵の淨め去られて、八面玲瓏になつてゐることは、我れ自ら死に瀕せる時か、最愛の人の死に陥らんとするを見る時ばかりである。天は苦しき方法を以て、我れに宇宙の秘密を學ばしめんとするか。我慢、私慾、虚偽、虚飾、功名、富貴、あらゆる念の甲冑に、十重二十重と堅めたる、其の外皮を衝き破りて、心の骨に應ふる程、鋭く深く貫き得る利刀は、唯一の死あるのみ。唯一の最愛の人を失なふ折の哀傷のみ。此の時受けし傷口ならでは、宇宙の命派と呼應して、眞に人生の苦しさ、痛さ、恐しさを、終に感ずることなからん。されば、我が身は不幸に似て、甚だしき運命の寵兒ならんも知れず。

明は湧き溢れ衝き上るが如き、心の懊惱を理性の重石にて壓鎮めやうとして悶ゆる中、胸少しく波穏になり、覺悟の影の揺れながらも、明徹に映るやうになりぬ。變化消長熄む時なき現世に立ちて、尙不

變の平和と永續の快樂を夢みる者は一般の人情であるが、波風あ
 き大海原に小舟浮べて、搖れざることを希願ふより難きことなり。
 多くの人は極めて淺薄なる快樂主義の迷信者ならぬはなけれど、此
 の境界を脱せざる者は、心常に快樂を願ひて、終生苦惱の牢獄に足
 搔腕くを免れじ。縱し快樂主義にしても、實てはエヒキエラス程の
 深い考へあらば、尙しも少しは其の目的に近寄ることも出来やう。
 流轉常なき外物に心を寄せ、出沒限りなき人事を追ひ廻し、附視ひ
 て、捕影縛風の徒事に脊を絞り、骨を碎き、神を疲らし、身を苦し
 むる程の淺墓なるはなし。心を以て物を役し、靈性に依りて慾を制
 し、心の清靜を得るの外には、眞の快樂主義の歸着點のあらうとも
 思はれぬ。『我れに麵麩と水だにあらば、幸福なると、ヂエービター
 神にも、一步だに譲る所なし。』の意氣ありて、始めて快樂主義も勢
 力あるやうに思ふ。世には壯健にて無情なる妻の、強面に啣つるあ

らう。賢にして醜き妻に、慊らず思ふもあらん。才貌兼備ふれども
 心邪僻れたるを娶りて、苦しむもあべし。我が百合子のみは、形
 も心も其の情も、我れより見れば殆ど缺けたる所あるを覺えず。な
 れども、彼の病は癒ゆる期なかるべし。完美なるもの、塵の世に長
 くは留まらじと思へば、是れも怨むべきにあらず。縱令同様はせず
 ども、心の誓ひに永久の契は込めたり。彼れが肉躰は雨にうたれ、
 土に歸りて、朽ち果つるとも、我が心の中には彼が不死の形に變り
 て長へに宿るべし。缺點多き生きたる婦人と、終生を送らんより、
 不死圓滿の百合子と共に、靜に世を終ることの樂さは幾百倍なるべ
 し。是れ我が清靜主義にも能く適へり。内躰を保つ間は、奈何なる
 人にも多少の汚點は離れざるべきに、死のみは人を清淨にする最高
 の道なれば、我れは彼れが死に依りて、汚れたる百合子を失なふ代
 りに、清き百合子を得るに到れりとも云ひ得べきならずや、と涙み

第七回

なく考へたれども、奈何やら自分の説は、尙充分に我が情を服する
の力なきやうに覺えて、一種悲痛の感は中々に胸を去らず。

絢子は七寶燒の花瓶に菖蒲の花を活け終りて、心に協ひしか、床框
より少し後に退却て、身を反せながら、悠然と眺めて居る。其所へ
女中の加彌入り來たりて、絢子が側に坐り、

「マア、結構にお出来になりましたこと。」

と笑ひながら眺め、直に又絢子が頭に目を附け、

「結構と云へば、今日のお髪は又實にお品宜くお出来遊ばしました
ことぬ。一躰、お嬢様はお毛が多くツて、お美事で居らッ志やる上
に、實に柔軟で御座いますから、阿常さんも爾云ツて居ました、思ふ
通りに結へますから、出来あがッてから、心持の宜いての、アない、

と爾申して居るので御座いますよ。」

絢子も我知らず、髪に鳥渡觸ッ見て、莞爾しながら、

「其れアお前、髪結さんの言なんだもの、宛にやアならないわ。彼の
人はお世辭者だもの何だか分りやア致ないわ。私よりかも、百合子
さんの方が、實に立派なお髪ぢやアないかえ。」

「百合子さんのものも、其ア何で御座いますけれども、貴嬢のお毛の方
が一段上等で居らッしやいますアね。」

「爾かさ。」

と絢子は、深く氣にも留めぬらしく、又熟々と活花を見てゐる。加
彌は些と取遣されたと云ふ狀で、絢子の横顔を、「お嬢さんは奈何し
て恚う素氣なからう。」と云ひたげなる眼色で見詰め、

「あ、さん。」

と呼嬢かける。

「何？」
と絢子は氣のなさうなる返事をして、此方向く、
「彼の、何だとか申すぢやア、御座いませんか……。」
「えッ。」

「彼の、百合子さんは、大變にお危いと云ふ評判で御座いますね。」
「あゝ、爾よ。此の節は血は略かないやうに、なつたさうだけれども、段々衰弱して宜けなくなるばかりなんだとさ。實にお可憐さうだわ。其れに、雀部さんもお可憐さうだわね。大變に御心配なすつて、每晚世間に知れないやうに、忍んぢやア、御看病に通つて居らしやるんだとね。」

「實に感心な方で御座いますね。今時の若い方にやア、爾いふ人は中々珍しう御座んすね。」
「眞實に爾だわ。彼の方は學者で居らつしやるから、其れア奈何し

たつてもね、違ふ所が有あんなさらアね。大變に人情をお重んじになる方なんだからね。」

「御兩親の方では、肺病患者を貰つたつて、仕様がなから破談にする方が宜いと仰有つても、何でも、雀部さんは聞かずに、矢張元の儘になすつて居らつしやるてえませんが、餘程惚れて居らつしやるのなんで、御座んすね。」

「惚れて居らつしやるか、何だか那樣事は知らないけれども、お前、それが人間の道ぢやアないかえ。今となつて肺病になつたからつて、直と破談をなさるのは、其れア雀部さんに出来ないのも無理はないわ。御婚禮はなさらなかつて、心の中ぢやア、お前、お二人どもに御夫婦の積で、居らつしやるのだもの。」

「若しか、百合子さんがお死亡なんなすつたら、又外から、お貰ひになるんで御座いませうね。」

「其れアお前、外からお貰ひになさるだらうさ。」
加彌は絢子の顔色を掛念らしく窺ひながら、

「お嬢様……。」

と云ひかけて、云ひ淀み、

「其時になつたらば貴嬢が、雀部さんへ、お嫁に入らつしやると思召は御座いませんかえ。」

絢子は涼しい可愛らしい眼元で、鳥渡加彌を睨め、

「お前、そんな事を云ふもんぢやア、なくつてよ。私はね、私はね、那樣友誼に背く、不義な事は奈何事があつても嫌だわ。お前笑談にも、那樣ことはお云ひでない。百合子さんが若しかお死亡なんなすつたら、雀部さんへ私がお嫁に往きたいなぞと思ふのは、お前何んぢやアないか。百合子さんの死ぬのを、願つてるやうなもんだわ。何故、お前は那樣悪いことを考へるの。眞實に宜けないぢやアない

か。」

と少し腹立ちし様子に、加彌は忠義の積で云つた言葉が案外にも的を外れて、却つて御不興を被むれるに、氣先を折られて、些と退縮みかけしが、老功だけに側へ反らして、盛返し、

「お嬢様、眞實に貴嬢の仰有るのが、至當なんで御座いますよ。百合子さんが、お死亡なんなすつたらばと思ふのは、其れア全く死んで呉れニア宜い、と願つてるやうなもんで御座いますね。是れア罪になりますね。」

「爾だわ。其位よく分つて居て、お前は又何故那樣罪になる事を云ふんだえ。」

「えッ。」

ど加彌は往き詰りて、詮事なしに、眼をばちくらせ、思ひ直して高い調子で、續けさまに空笑ひで間を塞ぎ、

「オホ、爾で御座いましたね。お嬢さま、加彌が悪いので御座いますよ。何卒ね、御勘辨なすって下さいましよ。兎角、下司の考へは宜けませんのね。何かを申すと、直と失敗って了ひますから。」

「お前、謝らなかつたッて宜いけれども、那樣ことは、以後腰氣にも出しちゃアなりませんよ。人様の耳へでも遣入らうもんなら、第一私が面目次第もないぢやアありませんか。」

「えい、決して以後は申しは致しません。飛だ粗勿を致しました。お嬢さま、お氣に掛けずに居て下さいよ。加彌は一轉宜けませんね。何か、輕佻で御座いますから……。」

「だから、お前、お慎みなさいよ。」

「はい、氣を附けますで御座います。」

絢子は何を考へ出したか、俄に俯向きて鬱ぎ込み、自分の心に對して語るやうなる調子にて、

「眞實に百合子さんが羨ましい。彼れでこそ、女に生れた効があるぞ云ふもんだわ。」

と云ふ。加彌は小耳にはさんで、怪訝な顔色で乗り出だし、

「貴嬢はマア、變なことを仰有るぢやア御座いませんか。折角の御縁談も肺病の爲に祝言の運びにならずに居る、不仕合せな百合子さんを羨ましいたア、何事で御座いますよ。那樣延喜の悪いことは、笑談にも仰有いますなよ。」

「否、延喜が悪い事は些ともないわ。百合子さんのやうな身になつて死んだらば、無本望だらうと私は爾思ふのよ。」

「アラ先ア、飛でもない事を仰有る何故爾も執拗なすつたことを仰有いますえ。」

「私は何も執拗はしないわ。眞實に心から爾思ふんだもの。」

「其れは又奈何いふ譯なんで御座んすよ。」

「お前考へて御覽なね、爾ぢやアないか。自分が一心に思ッてる人に、唯思はれるばかりでさへ、中々出来にくい世の中に、其のお方と本望通り御夫婦の契約が濟めア、先づマア願ひは叶ッたと云ふもんぢやアないか。彼の御病氣で一所になられないのは、不仕合せと云へば云ふやうなもの、其れが爲めに、焦れたお方に看病をして戴いてさ、何よりかも尊い愛する人の誠心の、限りない賜を充分に受けて、嬉しい夢の覺ない間に死ぬんだもの、此の位結構なことはないぢやないか。」

「へえ、爾で御座んすかね。」

と加彌は不服と疑ひどが、喉に聞えてゐるやうな聲で云ツて、まぢりまぢり絢子の顔を目成ツて居る。

「長い間にはね、人の心にも移り變りはあるものなんだからね、幾等思ひ合ツた情交でも、時々氣まづい事も出来るだらう。詰り無垢

な愛に疵を附けなけアならないわ。其に屹度一生の中に一度は死別れは逃れられないから、同じ其の悲みをする位なら、無取な愛を互に抱いて潔く別れる方が、幾等増しだか知れは致ない。褪色ぬ中に散る所に花の價値はあるぢやアないか。戀の熱の頂上で惜しい／＼と思ひながら、息引き取ツて了ふのが一番に嬉しからうと思ふ。百合子さんのやうなのが、世の中で此の上もない幸福な人だらうと爾思ふね。だから、私羨ましくツてならない。」

と云ひ終ツて、ホツと吐息を吹き、羨るゝやうに垂頭るゝ

加彌は絢子の言葉の畢らぬ中、「お嬢さま、お嬢さま。」と遠き返んで云ツて、氣忙しなさうに、襟掻き合せ、前倒るやうに膝を進め、

「お嬢様、そんな分らない事が御座いますものかね。生きて居ればこそ思ツて居る方ど、一所になツて、嬉しいと云ふこともありませんけれども、死んで了ヤア這麼詰らない事はないぢやア、御座んせん

か、其れを羨ましいなどと仰有るのは、貴嬢は奈何してもお執拗な
 すって居らつゝまやるに違ひが御座いませんよ。」
 「加彌や、お前何故那樣に大い聲をするんだよ、低い聲でも談話は
 分るぢやアないかえ。」

「其れは、爾で御座いますけれども、貴嬢は餘り執拗たことを仰有
 いますから、加彌も遂何で御座んさアね……。」
 と氣が附いて、聲をひそめて笑つてゐる。

「加彌や、私ア些ども執拗て何かを云つてるんぢやアなくつてよ。
 其れアお前、焦れてる方ど一生波風なく添ひ逃げられ、是の位
 結構なことはないけれど、中々爾は行きやア致ない。充分すれ
 ば蹴れると云ふから、果報焼で戀しい人と一所になれば、兎角、何
 かの邪魔が遣入つて、泣いて暮すやうになるのが、世間には多いの
 だよ。だからね、満足なことは到底駄目な位なら、寧愛してゐる方

と心で契つて、互に戀の熾んな中に、心持よく死ぬ方が一番だと爾
 思ふわ。」

「宜げませんよ、お嬢さま。貴嬢の仰有ることは、何だか、坊さん
 か、お比丘尼でも云ひさうな事ばかりで御座いますね。今の若さに
 那樣心細いことを仰有つちやア、仕様がないうぢやアありませんか。

其れに、百合子さんがお死亡なすつたらば、雀部さんへお嫁に
 往きたいと思ふのは、其れア罪にもなりませうけれども、此方ぢや
 ア飽までも、お二方の芽出度く一所におななさるやうに、と願つ
 て居てあげても、壽命ですから仕方がない。若しか百合子さんがお
 死亡なすつて、奈何せ寮夫でお出でなさる譯にも参りませない
 から、他所から御細君をお貰ひになるとなつたら、其の時には貴嬢
 が彼方へ入らしつても、些ツとも悪いことはないぢやア御座んせん
 か。」

「其れだつても、百合子さんの心が残つてゐるから、雀部さんの所へなぞ往かうもんなら、嘸寐覺が悪からうと思ふわ。其れに第一も友達達の戀人の所へなぞ縱令死んだ跡だからと云つて、私が往くのは、道ちやアないもの。」

「貴嬢はね、爾仰有いますけれどもね、百合子さんにしても、何道せ外の方に雀部さんを添はせる位なら、一番に間好の貴嬢に添はした方が、死んでからも心持が宜い譯ぢやア御座せんか。」

「それはお前、御當人に聞いて見なけア、奈何とも云へはしないやね。」

と庭の彼方を無心らしくツツと眺めては居れど、心は奈何なる方に迷ひゐるも明白ならず。

第八回

雀部は縱令婚禮の式は擧げずとも、妻と定まれる百合子が、危篤の病を往らに見過ごすに忍びず、及ぶだけは自分も手づから看病致したしと飛鳥家へ申込めるに、主人正信は内約こそは整ひたれ正しき表向の儀式濟まぬ中は、眞の夫婦と云ふものにあらず。且は斯る難症に罹りある事ゆゑ、先様より何時破談と云ふことにならうも知ず。

縦し左はなくとも、奈何なる事情の起こりて、不縁にならずとも限らねば、餘り足繁く出遣入り、娘が看病などなされては、世間の口は蒼蠅きもの、互に再縁の邪魔になどなりて後に迷惑する事もあるべし。明さんのお意志は涙の醜るゝ程嬉しけれど、右の譯ゆゑ、看病にお出でなさる事だけは、心なきに似たれどお断り申さねばならぬとの挨拶なりき。百合子が母は之れを洩れ聞き、聲が情の有難さやら、娘が心の不便さやらを思ひ遣れば、先向の望みを素氣なく断り云ふは餘りに慘酷しい仕方なりと感じ、表向主人よりの挨拶は是

非なけれど、私一人が心得て筋と裏口からお通し申し、娘にお遣はせ申す分の事は、別に子細のあらう筈もなからうと夫にも説き勧め、雀部方へも此の趣を詳しく手紙にて言ひ遣りぬ。

青葉の車、尙折々は翻るゝに、空名残なく晴れ、烏後樂園の林に亂れて、黄ばめる月、大いさ白の如くなるがニユライ塔の彼方に懸かり、庭の生垣に雪花毬の花白き夕、雀部明は百合子が家の裏口より、人目老のびて訪問れぬ。

百合子が母は明が聲を聞き附け、縁側に出で迎へ、

「マア、能く入らして、下さいました。サお上んなさいまし。」

「學校の方の受持時間が多いもんですから、途晚くなるので困ります。今時分上るのは實は失禮ですけれども……。」

「否、人の眼に立たないで、却って此の方が宜しいので御座いますよ。」

明は靴を脱ぎ、直に百合子が病室に通れば、百合子は病を力めて、敷團より下り下りやうとする。

「マア、其の儘にして、お出でなさる方が宜し。」

と明が制すれば、母も、

「お前、悪いのなんだから、失禮だけれども、御免を被って、動ずるに居る方が宜いよ。」

と云って、此方向、

「何卒、御免下さいましよ。」

「サ、何卒、その儘になすって、居て下さい。」

百合子は唯微に、

「久潤。」

と云ひて、頭をさげて俯向きあるのみ。母は強ひて笑顔をつくり、

「お蔭さまで、此の節は小量よろしい方で御座います。マア貴下。」

御覽なすつて下さい。顔の色飽も、餘程前よりは宜いかと存じますの。

明は俯向きある百合子が顔を、横の方より鳥渡視きて、直に義母と見合はする互の顔は悲しき秘密を叩く状にて、二人の睚怪しく動き始むる途端、此方も彼方も一度に顔を俯向けぬ。

母は百合子が病の極めて重い事は知り居れども、尙慾心にて死ぬものとは覺らず。長くは掛からうが、全快の期の必ず来るべきものと信じ居るに違ひなし。されど、折に觸れては心細く悲しき事の胸に、浮ぶことのないにもあらず。

三年五年連れ添ひたる間すら、僅のことより愛想を盡かして、妻を捨て、夫に別かるゝもある世に、唯結納の濟みしのみにて、尙婚姻もせざるに、明か百合子へ盡くす情合は子の三四人もある夫婦とて中々及ばぬ程なれば、其の誠心を感じずるに附け、一日も早く娘の病

氣を直させ、興入れさして、女夫間睦ましく朝夕嬉しがる二人の顔が見たきものと此の願ひ忘るゝ間なし。

毎日々夕方より、明は百合子が看病に通ひ詰めて、怠る日とてはなく、来る度に其れどは云はねど、肺病に宜きと聞く、あらゆる滋養物を調へてか弱に母へ贈り、さる名醫の處方にかゝる神薬をも高價拂ひて購ひ、之れをも絶えず自ら提げ來たりて、未來の妻に薦むるを樂しみのやうにせり。

明は此の二三日以前より學校の試験始まり、暇なしとて見舞の手紙のみ送り、尋ねては見えざりしに、漸く今日は手隙になりたればとて、火點頃より訪ひ來たりて、例の如く、色々ど深切に世話し、氣の晴るゝやうなる話なども聞かせ、百合子と母とを慰めぬ。

母は不躰よりは血色宜き娘が顔を熱々眺め、

「お前の病氣は明さんの御深切ばかりでも、直に癒りますよ。だか

らね、何でも氣を大きく持つて、精出して薬を戴きさへすれば、若い者のことだもの、譯アないから、其の積で眠り致して居なくちゃアならない。」

「ですけれどもねえ、阿母さん。私は何だか、癒りはしなからうと、爾思ふことがあつて、宜けないの。」

と側方に居る明の顔を、盗むやうに窺と見て直に俯向く。

お前、そんな氣の弱いことを考へるから宜けないんだよ。何でも那樣馬鹿々々しい事があるものかね。早く鹽梅を快くして、今まで明さんが盡して下すつた、御深切の御恩返しをするやうに、彼方へ參つたらば、骨身を惜まず、何かのお世話を致して上げなくちやなりませんよ。」

「爾出来る身になられるなら、宜いけれども、阿母さん、奈何なるか知れないぢやアありませんか。」

「又お前は那樣ことを云いだ。明さん、些と貴下が叱つて遣つて下さいよ。實に此の娘は意氣地がなくつて、仕様がなないので。」
明が胸の中では百合子の必死を期してゐること故、思ひ切つて空々しい慰めの言葉も、何とやら口から出しにくいやうに思ひ、暫時は逡巡ひしが、

「何でも阿母さんの有仰る通り、胸を廣く持つて、詰らん事を氣に掛けん方が宜しいだらうと思ひますね。氣力の奈何と身軀の強弱とは、密接の關係を有してゐますからね。」

百合子は無言で聞きおたるが、何と思ひてか俄に笑顔になりて、
「阿母さん、爾ですれねえ。氣の持ちやうで、病氣も善くなつたり、悪くなつたり致しませうね。」

「爾ですともさ。だから、旋りなさいよ。早く快くなつて、明さんのお側で、御用を達すやうに、お前一日も早くならなくつちや、宜

けないぢやアないか。」
百合子は瘦せたる我が手を凝望と見詰めて、白き頬に笑渦深くあらはし、羞しげなる氣色にて、

「何時爾なられるでせうね、阿母さん。」

と母の顔を見遣る途端、意外明の眼に出會ひて、周章て、側へ顔を剪らす。

「何時ッて？、お前、今一月も立たうもんなら、彼方へ往かれるやうになりませうよ。」

「眞實に、爾なりましたかね。」

と敷團の縞を指頭で、靜に撫で廻してゐる。

明が胸には一種云ひ難き悲しみの氣、突き入るやうに感じぬ。百合子は早く全快して、結婚の出来るのを待ち焦れてゐるのであるが、其れは一場の夢にならうも知れぬ。運命の後姿は萬人これを見るこ

とを能くすれども、其の來たる時の前面の扮粧は、何人も豫め窺ひ得るものなれば、死の掌上に弄ばられながら、人は尙笑顔をつくりて、未來の樂みを心に描き、輝蟒と榮華を競ふの果敢を知らず。百合子が母は鳥渡立ちて掾側に出で、

「明さん。鳥渡此方へお出でなすッて御覽遊ばせ。亭主が自滿の盆裁が御座いますから。」

「へえ。拜見致しませう。」

と老女に跟いて病室の外に出づれば、老女は此方へと手眞似にて知らするに二間隔たりし應接の間に通りぬ。

明は老女の様子にて、秘密の咄と覺りたれば、傍近く座に着きて、聲を潜め、

「何か御用で御座いますか。」

と云へば、老女はツツと明の顔を眺めて何か云ひかけさうにして、

唯眼を屢敲いて唇を微に顔はし、其の儘俯向いて了ひぬ。明も老女の胃を大抵は推測りて是れも胃迫りて黙然と下を向いて考へ込む。程経て老女は涙聲にて、

「實に此の節は、劇く神経が強くなりましてね、何かを鳥渡と言ひましても、氣に掛けて其れを心配しますから、迂濶彼の側ぢやア、お話も出来ませんの。實に困りますよ。其れで此方へお呼達申したので御座いますね、明さん、如何なもんで御座いませう、貴下のお見込では。」

「爾ですぬ。」

と吐息响いて頭垂れて了ふ。

「此方の氣の故ですか、此の節は、些とは宜しいかとも存じますが、今迄も宜かつた事もありませんたけれども、實に宜いが宜いにはなりませんでしたからね。其に番弊なお話ですが、鹽梅が早く快くなる

やうにツて、彼れがお不動様を大變に信心を致してをるので御座います。が、彼れは爾ですぬ、一昨日の朝の事なんですがね、昨夜の夢にお不動様が大勢入らして、何だか知らないけれども、大變に私をお叱りになつたから、到底私は今度は快くなるまい、なんて爾云ツて居ますから、亭主などは死ぬ前兆かも知れないなどと、爾申しますから、實に心配で、心配で溜りませぬので御座いますよ。奈何なもんで御座いませうね、貴下のお見込は。」

と明の顔を見詰りながら、奈何にも心配さうに答へを待つ。明は唯黙して、深く考へ込みあるらしく、挫々しくは口を開かず。

「奈何したもんで御座いませうね。到底、宜けますまいかとも存じますが。」

明は漸と顔を上げて、

「左様、何とも云へんですが、私の考へでは、兎に角、頗る重症だ

らうとは思ってゐるのです。死ぬものと昔が極めてゐる人が、全快するの御座いますし、大丈夫だと云つてゐる奴が、死ぬこともあるのですから、何とも断然たることは云へませんが、頗る危篤に迫ま

つて居るだけは、争はれないかと思ふですな。」

と云つて、其の儘俯向いて、腕拱いて了ふ。

「ぢやア、死にませうね。」

「左様、死ぬかも知れません。」

「萬一、又、それでも助かるやうな事がありますまいか。」

母は何と思ひてか、側を向いてしく／＼泣き始めぬ。

「唯一日でも、責ては唯半日でも、貴下と一所にさせて、丸番の一つも結はせてからの事ならば、同じ殺す味にも、幾分か諦めやうもあるだらうと存じますが、此の儘殺すのは、實に可憫さうで、可憫

さうで、溜りません。ですけれども……。」

と未は泣聲に消されて聞えぬやうになれり。明も俯向になりて、目を壓蔽いて言葉なし。

「其れに當人は、口ぢやア、折々到底駄目だから、阿母さん私は死ぬものど諦めて下さいなんて、爾いふ事もありませんけれども、心の中では、矢張快くなつて、貴下の所へ往かれるものと思つて居りますで御座んすが……。」

と噓上げて暫時途切れ、

「死ぬと云ふかと思ひますと又その跡で直お嫁に往く氣に成つて、支度や何かの事に氣を揉んで、何も彼も、仕立屋さんへ出して宜けないから……大概は整然と出来てゐるので御座いますけれども、夏物や何か、些どばかし残つてゐる分を、早く快なつて、阿母さんに手傳つて載いて、私が拵へますの何のと、申して居りますから、

尙の事可憫さうで溜りません。何にも知らないで、お嫁に往くのを
樂みにしてゐるかと思ふと、胸が一抔になります。お察し下さい。」
と涙はらくと泣伏したり。

病室の方にて、百合子が咳をする聲聞えて、

「阿母さん、阿母さん。」

と呼ぶに、母は俄に涙ぬぐひて、

「あい。今往きますよ。」

と答へはすれど、直には立ちかねて、尙舞と押當てたる袖を顔より
離さず。

母は百合子に呼ばれて、何か急に用があるのであらうと、明に鳥渡
挨拶し、涙拭ひて病室に這入れば、百合子は額を抑へて、悄然と枕
に凭りかゝり、物思ひに沈み居たるらし。

「何か用があるのかい。」

と母は側に坐れば、暫時は答へなく、纏て重げに頭を掻げ、

「雀部さんは？」

一句言ひて、又深い物思ひに沈む。

「明さんかえ。明さんはね、彼方の八疊へ入らして、此の間阿爺
さんが買ッて入らしつた、盆裁を見て居らっしゃるよ。此所は餘り
取散してあるからと思つて、彼處でお茶を一つ上て居るんだよ。お
前、奈何かお致のかい。」

「否……爾なの。」

と俯向いてゐる。

「阿母さんが、態々來たのに、此の娘は可笑い娘だわ。何も用はな
いのかえ。」

百合子は矢張無言で、忸怩して、何やら胸に云ひたい事はある様な
れど、云ひかねて居るらし。

「用があるなら、早く爾お言ひなさいよ。彼處へ明さんを置去にし
て居ては、失禮に當るから。」
漸と決心をしたと云ふ状態で、

「彼のぬえ、阿母さん。」

「あゝ、何だい。」

「雀部さんは、奈何思ッて、居らッまやるでせうね。」

「何をさ。」

百合子は復俯向いて躊躇ふ。

「何を雀部さんが、奈何思ッて居らッまやるで、爾云ふの。」

百合子は彼方向きて、眼の縁にかゝる涙を、見られぬやうに拭と拭
ひ、

「私が這麼見すばらしい軀に、成ッて了ッたから、何とか思ッて居
らッまやりやアままいかと爾思ッて。」

「何も別に仰有りやア恙ないよ。唯一日も早く快くなッて呉れ、ば
宜いどばかり爾仰有ッて、大變にお前の事をお案じなすッて居らッ
しやるのだよ。」

「だッても、阿母さん、這麼に自分で見てさへ不潔しい程瘦てるの
に、煩ッてるから仕方はないけれども、這麼に亂次のない有様をし
て居るんですもの、萬一か雀部さんが可厭にお成なさりやア致まい
かと私爾思ひましたの。」

「其アお前さんの廻氣なんだよ。毎日々々、お多忙い中から、如彼
やッて見舞に來て下すッて、色々御深切を盡して下さる位なもの、
瘦やうが奈何だらうが、那樣ことで愛想を盡すやうな方ぢやアない
から、其の事なら、お前、決して心配をお致でないよ。兎角、色々
なことを氣にかけるから、其の爲に尙と氣分も悪くなるし、病氣に
も障るんだからよ。明さんの事なら大丈夫なんだから、安心をお致

なさいよ。」

百合子は側の方へ向きて、殆ど聲立つる程に泣出しぬ。母も思はず貰ひ涙に袖の濡るゝを覺らぬと、態と聲晴やかに粧ひて、

「大丈夫なんだから、お前其の積で、精を出して、お薬でも戴だいて、早く快くなつて、お嫁に往かれる様に、成らなくツちやア宜けなさい。」

百合子は思はず此方向きて、淋しげに莞爾と笑む。

「宜いかえ。」

と母も娘の心を察し遣りて、遂笑顔になれば、百合子も少し機嫌直りて、

「あゝ。爾致しますよ、阿母さん。」

といふ返事も何となく勇みたり。

「お前風でも引かないやうに氣を附けて、些と横になつて休んでゐ

る方が宜いよ。阿母さんは彼處で雀部さんへ上る、御飯の支度を致せなくツちやアならないからぬ。學校から直に入らしつたのらしいから。」

「爾？。私が恁なんだから、阿母さんは一人で難儀をなさるのね。早くお手傳ひが出来るやうに成られると宜いけれども。」

「何、阿母さんは尙若いもの、其に別に忙かしい事があるぢやアなし、初も居るのだから、お前は些ども、氣の毒だなどと思ふことはないよ。ぢや私は鳥渡彼處へ往くから、用があつたらばお呼びなさいよ、初を遣すから。」

「えゝ、爾しますよ。」

母は襟側傳ひ居間の方へ立去りぬ。

第九回

若葉の緑漸く蔭と共に黒うなりて、青田渡り来る断れ断れの蟬の音に、僅着換へしは昨日今日なれど、單衣の肩觸輕きが心地よく、紫陽花の花房目に立つ程日増に色附きて、烏瓜の蔓垣根を越して物干棹を絡みて、垂るゝ様に風情覺ゆる頃とはなりぬ。

百合子が病は此の節になりて、思ひの外快くなれり。日外とは生れ變りし程に、氣分も引立ち軀の肉も増せるに、折々は家に近き田圃の邊を靜に散歩もし、濃茶薄茶の復習に氣をもはらす。庭を漫歩きしては、心に適ふ花を折り來たりて瓶に活けなどして、殆ど胸の病も忘れし如く樂しく送りき。

明は今も隔日又は二三日目には必ず見舞ひて、百合子母子を慰むることを怠らず。或土曜日に尋ね來たりて、百合子親子に、大宮公園

へ一晚泊の積にて、氣保養の爲出掛けて見る氣はなきやと勸むるに、百合子も自分の家の居園の景色は目に飽きたれば、何處ぞへ往きても得て彌々往くことに極まれり。母親附添と云ひ、夫婦の契約も致たる間なれば、世間に知れても、左のみ悪いこともなからうとは表面の分疏にて、内心は明が心も察し、娘が胸の中も推測りて不便に思ひ、餘り結婚も遷延こと故、責ても心の遣りに、一日なりとも心置きなく一所に樂しまして遣りたいと、恐に歸りたる親の慈悲なりき。

早速支度整へて上野より瀛車に乗り、同車の若き男などに、「いよ、新婚旅行とお出なすつた。」などと叫ぶが先づ嬉しく、王子より北の風景左のみ奇なるはなけれど、久しく病床にありて、早稲田田圃より外には見しことなき百合子が目には、都て新しく、珍しきや

うに思はれ、浦和の邊往く頃は、身は晝裏の人になれるやうに覺えて、思はず微笑みぬ。程なく大宮の停車場に着きて、茲より下車し、保養なればと徒歩にて公園まで、三人は田舎道を辿りぬ。

萬松樓の離室を借りて、浴衣に着換へ、此所の名物なる鯉こくを注文し、例の鑛泉に入りたる後、靜に枕取りて横になり、奥深き松林の梢くいでりて吹き入る風に夢を洗はせ、少時都を忘れて山住ひの睡穩かなりき。

「お客さま。お誂へが出来ました。」

と女中に喚び起こされし頃は、氷川神社の杜に日は落ちて、松籟聲こまやかに二階の燈火赤き頃なりし。

母は一番に眼を覺まし、

「百合子や。サ尤う、お起きなさいよ。お膳が来たから。」

と揺り覺まさされ、明が眼を開かぬ中に、側にて顔化粧し、着物など

着換ゆる。其の中、明も起きあがりて、三人睦むく語りながら膳に向へば、田舎料理の庖刀は拙けれども、今日は何となく妙きやうに覺えて、明も常には飲まぬ麥酒を、老人の相手に二三杯かさねて、宜い機嫌になれり。

夕飯を了ひたれば、三人一所に、徐々戸外に出て見ませう、と百合子が言ひ出したれど、母は老人の事とて、兎角驅を動かすを嫌ひ、屋内で横になつて居る方が宜いとて自分は留まり、二人の者を勧めて出し遣りぬ。

若き二人は袖の觸合ふ程に肩を並べて、靜に松林の小徑に出づれど、互に言葉は拙々しく交しかねたり。されど此方より彼方の胸に、無腔の笛の音情を載せて限なく通ひぬ。葉越の月のおぼろなる影をゆるく踏みて、梢はなるゝ露の聲しげき間を往くに、二人が靈魂は宛然芳香高くして味ひ甘く、膚觸微温き一種の霞に軽く浮み、五彩う

るはしき雲に包まれ、月の宮居に昇るばかりの夢心地なり。
 明は僅二間或は三間ばかりも、百合子が遅れる事あれば、必ず立止
 まりて追附くを待ち、手こそは取らねど、心の限り勤りて往くに、
 漸く林つき、地ひらけて、月まどかなる葎澤の畔に出でぬ。池に突
 出だせる棧橋の上に、二人は袖擦合ふ程に躊躇みて、小魚波を碎き
 て月ゆる状を眺むる。默然として水の面を見詰り居る明が胸には、
 潔く悲しき一種不思議の感浸み渡りぬ。波収まる時には、鮮明に浮
 ぶ嫦娥の姿も、微風水を渡れば、忽ちに掻消す如く影は亂れて覓ね
 難し。我れも我が戀人も等しく是れ波に住む月の、兎もすれば風に
 も吹き消され、礫にも碎かるゝ淺猿しの世にさすらひの身ならずや。
 プラトンの此の世を影の世界と観じて、缺くる事なき現世を「イテ
 ア」の境に夢みしも、飽ぬ節の繁き世を啣つ果にはあらざりしか、不
 治の病に罹れる我戀人は最早や『死』の囚虜となれるにて、今斯く

我が側近くに佇立みて、同じ一輪の影を互の袖に分ち、同じ野茨の
 香に浴して、離れぬ状なり、離れぬ情交なりと人目にも見え、我れ
 も思へど、死刑の宣告を受けし者に、獄舎の窓より暇乞の對面を少
 時許されたるにも似たり、など心に思ひて、餘念なく空仰ぎて月に
 見惚れゐる百合子の方に振向き、不圖その姿を眺むれば、明が眼に
 は、此の世の人とも見えぬ。早や汚れたる世を離れて、神の御國に
 生まれ出でし天女とも思はるゝ。其の蒼白き顔に月の光添ひて、肌
 膚がいやき、黒眼勝なる眼を洞然と開きて、奈何にも罪なげに、天
 の彼方に瞳を注ぎゐる様は『無常』の颯風に荒れ廻る『死』の魔王
 の姿にも近し。百合子は晴々とした顔に笑を堪へて此方向き、
 「眞實に良い月夜で御座いますのね。實に宜い心持で御座いますよ、
 急やッて風に吹かれて眺めて居ますと。」

「爾です。私も非常に愉快なのです。」
 勇みのなき調子なり。百合子は男の淨かぬ様子には氣も附かず、一人で莞爾々々しながら、何か俯向いて鳥渡考へ、
 「早く病氣が直ると、運動や何か思ふ通りに出来て、嘸嬉しいだらうと思ふけれども……。」
 と獨言のやうに云ふ。

「何、直に全快なさるに違ひありません。餘り心配をなさらん方が宜い。友人や親戚の者も貴嬢が早く全快をする事を非常に希望して居て呉れるのです。結婚の式を挙げる時には、充分祝して遣らうと、云ツて居るのです。」

「は、左様で御座いますか。」
 と軽く受けた積であつたが、顔を赤くして、度を失なツて、少し狼狽をして居たらしら。

「非常に熱心に待ツて居るのです。」
 今度は百合子は口の中で、何やら云ツたやうであつたが、聞えざりき。明は實際の實事を述べたるに過ぎざれど、何とやら、百合子を欺いて居るやうな氣がして、胸安からず。

「各人は劇く結婚の式に重きを置いて、其れを非常に待ちかねて居るのですが、一方から云へば其れも人情の自然ではあります。私自身に取ツては、左程儀式には重きを置いては居らんのです。勿論爾かと云ツて、軽く見て居る譯もありません。が併し結婚の骨髄になるべきものは、外にあると信じて居るすからな。精神上の結合が一番大事であつて、若し此の心の一致と云ふものさへ成立つて、互に相愛すると云ふ情が、雙方に通じてゐさへすれば、縱令幾年式は挙げなくとも、又同棲する事が出来ずに、別居してゐても、夫婦たるに於て缺くる所はないものと、思ツて居るのですな。ですから、

眞の夫婦と云ふものは、肉牀は縦し千丈の鐵壁を以て隔てられて居やうとも、又不幸にして一方がですな……、那樣事は決して願ひはせんけれども、例へば、私なら私が、國事の爲にとか、學説の爲に罪を得てですな、是れは譬喩ですが……、私が斷頭場の露と消える事があつても、若し貴嬢が靈魂の交際と云ふ事を解してさへお出なれば、夫婦の契に於ては、一毫も損ぜられんものと思つて居るのです。矧んや、互に往來も自由に出來、會談も心の儘である以上は、何も不足を感じはせんです。」

「左様で御座いますね。」

百合子の答へは、何となしに物足ぬやうな趣がある。

「と云つて、決して同棲を賤むのぢやありません。互に朝夕健康な顔を見て、萬事に助け合つて、愉快に暮すのは幸福に相違ないものであるが、唯それ丈の物ではない。奈何なる場合にも、愛情は長へ

に續くものであつて、他の奈何勢力も之れを割く力はないものである、と云ふ考へなのです。單に考へではなく、實際爾でなくては、眞の夫婦ぢやないと信ずるですな。」

「私も爾存じて、居るので御座います。」

今度は頗る確信のある言葉附であつた。

「私は御存じの通り、頑固な人間ですがね、決して妻を侮蔑するとか、冷酷なる取扱ひをするとか云ふことは、誓つて致ない積りです……。」

と云つて、少し躊躇し、更に思ひ直して、

「手短かに云へば、出來るだけの熱誠を以て、貴嬢を愛することが、私の望みと云つても宜いのですよ。」

百合子は何にも言はずに、息を詰めて唯俯向きみれど、誠心の答辭は眼に持つ涙にて其れと知らるゝ。

林の間より、ゆらり／＼此方へ飛び来たれる螢は、池の上を緩く渡りて、向ふ岸の藪蔭に光を匿しぬ。夜風少し身に沁むやうに覺ゆるに、明は百合子が身を氣遣ひて、立ちあがり、

「風を引くと宜けませんから、尤う歸らうぢやありませんか。」

「爾ですぬ。ですけれども、何だか惜しいぢやありませんか。」

「又明朝散歩することに致ませうよ。病後は氣を附けなくツちやアなりませんかから。」

「ぢや、歸りませうか。」

「サ、往きませう。」

と二人連れ立ちて、再び松林の細道を萬松櫻の方へと歩み往くに、往來の人全く絶えたれば極めて淋しき所なれど、百合子は何時までも此の道の盡ざるを願ふものゝ如く、風々立ち止まりて、歩行中々に振り返らば。

「貴嬢は疲れましたね。」

と明は振向いて問へば、

「否。爾ぢやアないんですけれども……。」

と何やら言ひたげに、顔をあげて其の儘黙して了ふ。

「サ、私の腕につかまって、往くが宜ござんす、幾等か樂でせうから。」

と腕を與ふれば、百合子は無言で鼻と縋りて静に歩み出だせり。松の葉深く重なり合ひて、殆ど互の顔も見分け難き所に來し時、百合子は明が腕を一段強く握りて、

「貴公の御深切は、縱令死にましても、私は忘れア致しませんよ。」

と小聲で云つて、倒るゝやうに躊躇きぬ。

「オ、危険、奈何致しました。」

と抱き起して勦りつゝ宿に歸りぬ。

翌朝軒の雀に起されて眼を開けば、晴やかに射す日影、櫓の葉を障子に映して、草刈る人の田舎唄、朝風爽快に枕に通ふ。百合子は先づ床を出で、着物を着換へ、下に降りて嗽手洗など済まし、軈て次の間に髪を直し、化粧などする頃、漸く母と明は眼を覺まして起き出でぬ。

朝飯を了ひて、此所の庭を唯一人明は徐々散歩を始め、運動場の鞆に乗りなごして、遊びある所へ、百合子も跡より母と共に此所へ來たりて、丁子葛の香清きわたりの木蔭に躊躇み、草花を摘みて、指頭にて玩弄になごして他愛なく戯れぬ。母は笑ひながら、百合子の方を向き、

「意外に悪戯好きな奥さんだね、お前はさ。」
と尙笑ひ止まず。

「阿母さん、何ですッて？」

と百合子は訝しさうなる顔をして微笑む。

「實にねえ、罪のない奥さんで、固ると云ふのさ。」

「奥さんて誰？」

「お前がさ。」

百合子はさつと面を赧めて、草花を摘む手を鳥渡と控へ、花房を竊と地上に落として、眠を其の上に留め、

「嫌な阿母さんですぬ、私は奥さんぢやアありませんわね。」

と聞えぬ程に云ふ。

「其れだッてお前、宿の女中は、お前を奥さん、奥さんと爾云ッてるぢやないかえ。昨夜ね、彼の肥満方の女中が、何時御婚禮遊ばしましたので御座います、と爾云ッて聞くから、此の春合巻に致ればかりなんですけれども、尙全然娘の氣が取れないので、世話ばかり焼せて困ります、と云ッたら、御養子で御座いませう、と爾いふだ

らう。あゝ爾なんですよ姐さん、我儘者だから、お嫁にやア貰ひて
がないから、養子を致しましたよ、と爾云って笑つたのさ。」

「阿母さんは宜けませんね、那樣ことを女中になんぞ云って、私は
耻しくって、尤う此所の宿の人達に顔を見られるのが可厭になつち
まふ。」

と少し憐ぐ。

「宜ぢやないか。眞實に一所になるのなんだから、鹽梅でも悪くな
ければ、今頃は幾等耻しくっても、奥さんと云はれて居るのなんだ
から。」

「其れは爾ですけれども何だか、軀裁が悪いですもの。」

「明さんも、學者では居らツ志やるけれども、何かい全で初心で、
小供見たいな所が、お有んなさるのだから、お前が丁度宜いのだよ。
其れに、先方には御兩親がお出でになるのだから、却て小供らしい

方が今の中は宜いかも知れない。生地老成てゐると、兎角、姑御さ
んど紛紜など起したがるものなんだから。」

明は何を此方にて語りあるとも知らねば、洋杖を振廻しながら、静
に二人の側へ歩み寄り、

「大層お話が面白さうですね。私も少しお仲間入をさせて、貰ひま
せうか。」

と其所へ立つ。

「大變に面白い、お話があるのですよ。」
と母は百合子の顔を見て笑らへば、百合子は赤くなつて、顔を俯向
け。

「阿母さん、今のお話は止しなさいよ。」

明は眞地目で、

「何です。珍談なら、私にも聞かして下さい。」

第十回

母は態と眞顔になりて、
「餘程の珍談で御座いますよ。」

百合子が病氣は大宮公園に往きて歸りし後も、霎時が程は快き方なりしが、或夜餘りに蒸暑ければとて、母と共に芭蕉庵下なる駒塚橋の上に行立み、浴衣の襟くつろげて、川面より吹きあぐる風膚に心地快きまゝ、更闌る迄納涼あることありしが、此の折何時の間にかやら感冒ひきて、俄に劇しく發熱を催ほし、多量に血を吐きて、例の病再發し、頓に容態悪くなりぬ。
夏も夢の間に過ぎて、青桐を揉む風のかきこぞと秋を呼くやう聞えて、桔梗色濃き邊に名も知らぬ虫の音哀れ多し。明は百合子が病、此の頃俄に頼み掛くなりしと聞き、毎日學校の歸途には立寄りて、

夜のふくる迄、枕頭に看病する、其の親切は親身の兄妹とて及ばざる程なり。

或夜例の如く見舞に来たり、十時頃になりて、歸途支度をすれば、百合子は何時になく床の上に起き直りて、

「尤う、お歸なさんですか。」

名残惜しさうに明が顔を見詰め、側面に居た母を近く呼び寄せて極小聲になり、

「阿母さん、私は其所の裏門まで、雀部さんをお見送申さうかね。」

「お前、病氣なんだから、其れア不斷なら、失禮なだけれども、御免を戴いて、矢張戸外へ出ない方が宜いよ。」

「ですけれども、お阿母さん、快くなつてお禮が出来る身なら、今恙うやツて失禮ばかり致して居ても、お詫の出来る時節もあるから、宜御座んすけれども、奈何なるか、知れやア致ないぢやありません

か。」と顔を背ける。

「那樣心細い事を云ふもんぢやない。今の若さに何だね。お醫者様も爾仰有ったぢやないか、感冒の爲に熱が出たから、少し悪いやうに感じられるでせうが、其れさへ無くなれば、舂した事はない、と云つて居らしつたぢやないか。」

母も百合子には見せぬやうにと力めては居れど、眼の端は溜みゐたり。

「其れは爾ですけれども、毎日懲うやつて、お出なすつて下さるのに、何時もお見送を致ないのは、何だか私、餘り濟まないと思ひますわ。今夜ばかりも其所までは是非お見送をさして下さいよ。」

母は病人の氣に悴つても悪いと考へ直し、

「爾かい。ぢや爾するのかい。」

「あゝ。」

と云ふ時、明はと辭儀をして、

「先ア、お暇に致ませう。」

と帽子を取りにかゝる。

「尙宜しいぢやア御座んせんか。」

「ですが、明日は又學校の時間が早いですから、先ア失禮を致します。」

「左様ですか、ぢやア此の娘も、其所までお見送が致たいと爾申ますから、お帽子は……。」

と請取りて百合子に渡す。明は其れには及びませぬ、と再三止めたれど、強ひてと云ふに、無理にも拒絶みかねて、親子に送られて庭に出でぬ。百合子は母の肩に縋りながら、虫の歩む如く極靜に飛石を避けて、躓かぬやうにと明の後に従ひ行く。月空に牙え渡りて、柴折戸際の入手の葉影、黒々と地に映り、一株の尾花、夜風に靡きて、

何處よりか枯葉二つ三つ明が肩の邊を掠めて飛ぶ。明は裏門際にて立止まりて振り返り、

「尤う此所でも別と致ませう、お道入なすつて下さい。左様なら。」

と云ふ母の言葉に續きて、百合子は名残惜しさうに、

「大變で御座いますのね、阿母さん。夜の田圃道ですから。」と帽子を伸べて渡す手も顔へて、「お大事になすつて。」も口の中なり。

此方は尙門の柱に凭掛りて見送る中に、男の影は何時か夕霧の裏に見えずなりぬ。

日外病を力め、母親の肩に纏りながら、明の歸途を裏口の門まで見送に出でしより、其の後も百合子は明が見舞ふ度毎に、側の人の病を氣違ひて、其れとはなく止むるを聞かず、最愛束なき歩武の、破牆に凭る夕顔の、根に力なき花の姿、あふなげなる風情にて、垂柳

の影暗き裏門際まで、必ず見送に出づるが例の如くなりぬ。

帽子を持ちて未來の夫の後に従ひ、庭の飛石傳ひ見送に立ち出る百合子は、左なきだに色白なるに、肺を患へてより尙一段と白くなれる所へ、晴渡る月の光照添ひて、蒼色を帯びて凄き程つやゝかなり。何事を胸に描きてや、何時も莞爾やかなる顔をして、門際まで附添ひて歩みゆき、帽子を明が手に渡して、

「左様なら、お静に……。」

と別れの言葉を後に受け、田圃の細道振り返り勝に辿りゆく明の方は、何時も眼に涙を持ちて、慕れながら、とぼくと踊る姿の哀れなりき。

百合子が病は秋の末になりて次第に募り、主任醫も今は包みかねて、其の實を親に語り、落命の期も愈々迫りたれば、心残りのないやうに、其の覺悟をなさるが宜しからうと云ふ。今更のやうに驚げども

詮なし。絢子は始終尋ね來りて枕邊を離れず。親身も及ぬ深切に百合子親子は深く感じて、何でお禮を申さう、と有難涙に暮るゝばかり。

百合子自身も到底助らぬと諦めしものか、或夜母と唯二人切になりし時、枕に縋りて苦しげに顔を掻げ、

「阿母さん。」

と云ツて、サツと母の顔を見詰め、直に突伏して泣き出だしぬ。

「何だい。喉でも乾くのから。」

と云へども返事なし。

「お前、苦しいのかい。お醫者様を呼びに遣らうか。」

百合子は俯向しまゝ濡聲にて、

「阿母さん。到底今度は私ア宜けませんからぬ、何卒、諦めて下さらう。」

「何だよ、お前。又那樣くだらない事を云ツてさ。」

「阿母さんは爾仰有るけれども、私は自分に能く分ツて居ますもの……。阿母さん、何卒、御免下さいよ。阿母さんの御病氣の、お世話を致して上げなければならぬ。答の私が、恚云ふ事に成ツて、顛倒に色々な御苦勞をさせるかと思ふと、私位不孝者はないと爾思ひます。何卒ねえ、阿母さん。堪忍して下さいさうよ。」

と泣泣して打伏せば、母も涙に咽返り、

「那樣ことをお云ひでない。病煩ひは誰にもあるものなんだから、必ず阿母さんに氣の毒なぞと思ツて、心配を致しては宜けない。又た阿母さんの悪い時には、お前の世話にならなくちやアならないのだから。」

「御恩返しの出来る身なら、宜御座んすけれども、明日だか、明後日だか、死ぬのを待ツてゐる私ですもの、幾等阿母さんの介抱をし

て、上げたいにも、尤う上げる事は出来ませんもの。」

「お前何故、爾悲しい事を云って、阿母さんを泣かすのだよ。」

と母も涙の止所なかりき。百合子は眼を閉ぢて、暫時は睡れる如く静まり返りて居るに、母は何とも云へぬ恐しき感じに胸打たれて、思はず周章しく枕邊近く膝行寄り、娘の顔を覗き込む。眼に餘る涙、車はらり百合子が顔にかゝれば、百合子は驚きし如く洞然と眼を開き、

「阿母さん、何か致たの。」

「否。何も致はまないけれども、睡つたのかと思つて、見たのだよ。」

「爾？」

と云へども、尙訝しうに母の顔見詰め、

「何故阿母さんは、泣いて居らッ志やるの。」

「お前が餘り詰らない、心細い事を云ふからだわね。」

「堪忍して下さいよ阿母さん。尤う那慶事は云ひませんからね。」

「わい。爾して下さいよ。阿母さんも尤う泣きやア致ません。」

母は愁しき顔を力めて娘に見せまいと氣を附ける。百合子は又何やら考へゐる様子なりしが、枕を氣にまながら一轉寐返して、壁の方に暫時向き、纏て再び元の方に寐直りて、

「阿母さん。私が叔母さんに頂戴した、彼の指環をね、絢子さんが大變に褒めて居らしたから、私彼れを絢子さんに上げたいと思ひますがね、今度何時か入らまッたら、上げて下さいな。私も色々絢子さんには、何かを戴きましたけれども、お禮も縁に致た事がありませんからね。」

「爾かい。お前上げたいと思ふのなら、爾するが宜いよ。今度入らしたたら、お前から直に上げるが宜いよ。」

「あゝ。爾致ませうね、阿母さん。ですけれどもね、何時お出なさ

るんだか、其れが分らないから困りますね。」
此の話の中に、下女は入り来たりて、

「奥様に旦那様が御用なさうで御座います。」

どの使者に母親は下女と居代りて勝手の方に出で往きぬ。

百合子は奈何にせしか、是れより他愛なく熟睡して、藥を薦めんと

て震起としても、食事をさせん爲に呼び覺ましても、少しく眼を開

きて直に又昏々と睡に入り、殆ど十時間餘は覺めざりき。折々要領

のなき囁言を口走りて、燈火暗き枕邊に着きゐる人々、氣味悪るが

る事も多かりき。

「サ、お不動様、お不動様、一所に私を連れて往つて下さい。」

と云ふかと思へば、其處に對手の居るやうに、

「何卒ね、私が死にましたらば、絢子さんを私だと爾思つて、可愛

がッて上げて下さいよ。何卒御夫婦になつて、間好く暮すやうに致

て下さいよ……。絢子さん、絢子さん、あらマア、貴嬢の丸髷の形

容は、變に可笑いぢやありませんか、其方へ烏波お向きなさいよ、

私が直して上げませう。」

など聲咄々として云ひて、寝顔の面に罪なげなる喜びの色を浮べ、笑渦

さへ明かに見ゆることあり。

翌朝八時頃になりて眼を開き、兩親を枕邊に呼び寄せて、言葉正し

く、

「長々お世話になりました。尤うお別れを致します。阿爺さんも、

阿母さんも、お軀を大切にしてお達者に暮して下さい。皆さんへ

も宜しく、爾仰有つて下さいよ。」

と殊勝しく暇乞して、程なく息を引取りぬ。

死せしより三日目に、百合子が遺骸は谷中の基地に埋められ、墓前

に手向の花露滋かりし。

明は會葬者の列には加はらざりき。日汐れて人影のさだかならざる頃、唯一人一枝の山茶花を購ひて、新しき塚に訪うで、亡き戀人の墓前に手向て、來ん世の契約を心の中に繰返して、身は空殼になりしやうに、程久しく茫然と立盡せり。

天泉眞面目なる明は、百合子死して後は益々眞面目一方になりて、學校に通ふ外は、書齋の中にのみ閉籠もり、殆ど友達との交通もせざるやうになりぬ。唯時々彼の山瀬とのみは、往來元の如く、折々氣の結ばるゝ時などには、此方より尋ね往きて、山瀬が面白き調子の話に心慰むを喜べり。山瀬は何かの話の序に、笑談ながら、

「奈何だい、雀部君、百合子さんの遺言を奉じてさ、絢子さんを賞ぶ氣はなにかね。」

と云へば、明は何時も、

「結婚談は先ア暫時止して呉れ給へ。僕は今妻の必要はありやアせ

からな。」

と云ひ消して了ふ。

絢子は折々英書の不審を質す爲に、明が許に訪問るゝは昔に變らねど、近頃は何とやら憂鬱に沈める様子にて、特質の花やかなる笑顔れも極めて稀ならでは見られぬやうになりぬ。

の百合子死して後は、曾て身に覺え有失戀の同情に深く心の動かされて、明を憫むの切なる故にや、百合子亡なりて後の我は、昨日の我にはあらず、と臆氣ながら慙る萌の心に動し爲か、何となしに明に對する情は日々に濃くなり往く心地せり。明の方にも、戀人を失ひて心淋しはればにや、以前よりは一層の温情を以て絢子に、交際ふやうになれり。されば側の眼からは、慕ひあうて居る戀中と見ゆるも無理ならず。思ふ同志添して遣りたし、特には何も彼も丁度似合の縁なればと、世話好の口を利ける向もありたれど、雙方言契

あ

ら

露 畢

(明治三十一年初夏の作)

ならでは竟に知る者なからん。

英

したる如く、「一生獨身で暮すが望み。」なりとて、少しも領承氣色はあ
らざりき。

三月目に到りて、明が書齋の欄間に、百合子が肖像懸けられ、其
の下端の餘白に、彼れが自筆にて、

A SORROW'S CROWN OF SORROW IS
remembering happier things.

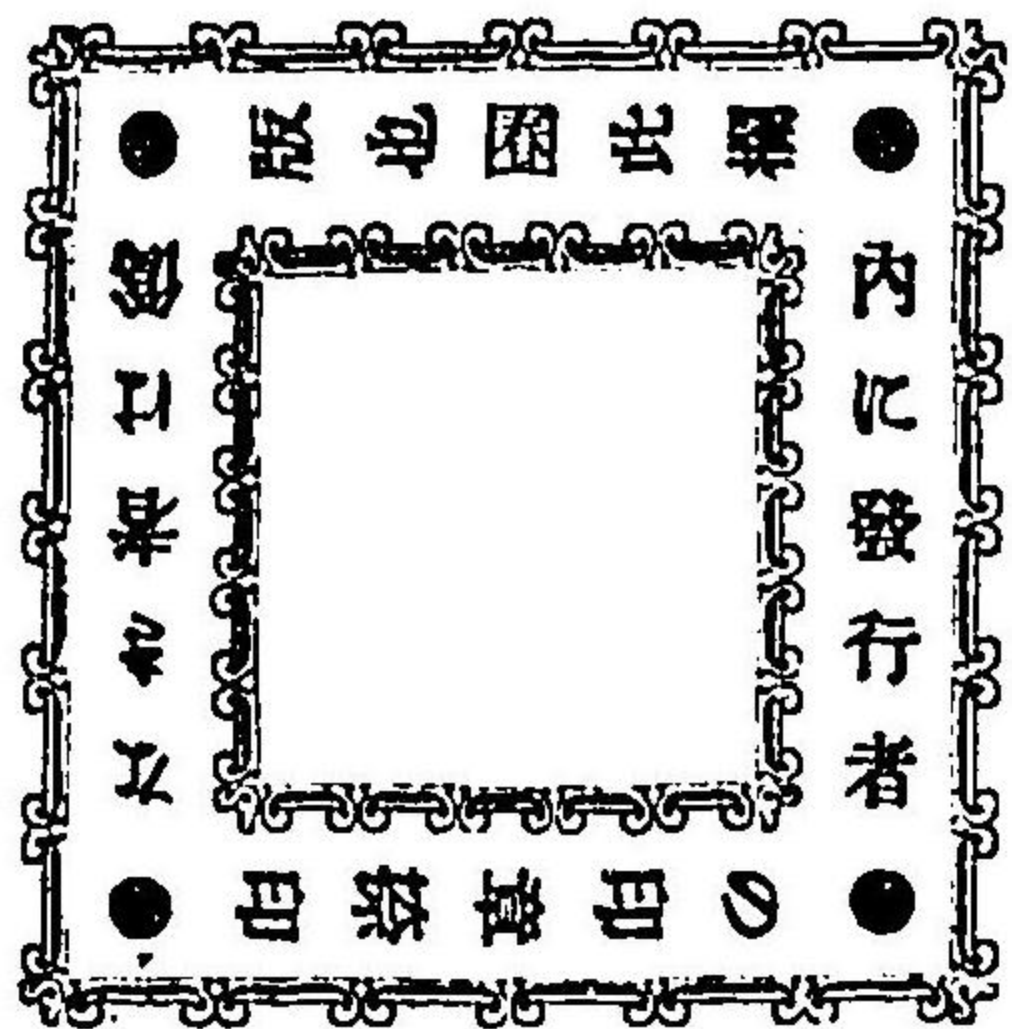
悲しみの多かる中の悲しみは、
樂しき昔志のぶなりけり。

どテニソンが一聯の名句を誌せり。

明と絢子とは情の上より見れば、極めて近寄り來れり。されど縁の
側よりは、千萬里の懸隔の尙残れる姿なり。此の懸隔は空なる雲の
一時なるべきか、長へに移し難き山の如きか、未來なれば運命の神

明治三十一年十一月十九日印刷
同三十一年十一月廿二日發行

版權所有



著者

後藤宙外

發行者

和田篤太郎

印刷者

青木弘

發行所

春陽堂

東京市日本橋區通四丁目

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

電話本局五拾壹番

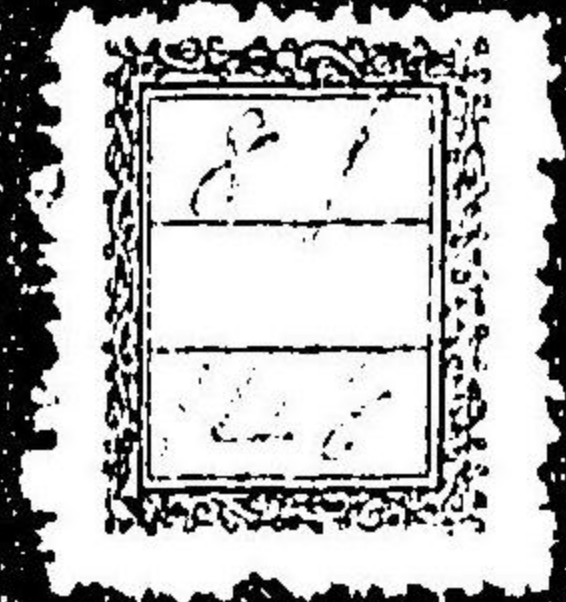
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

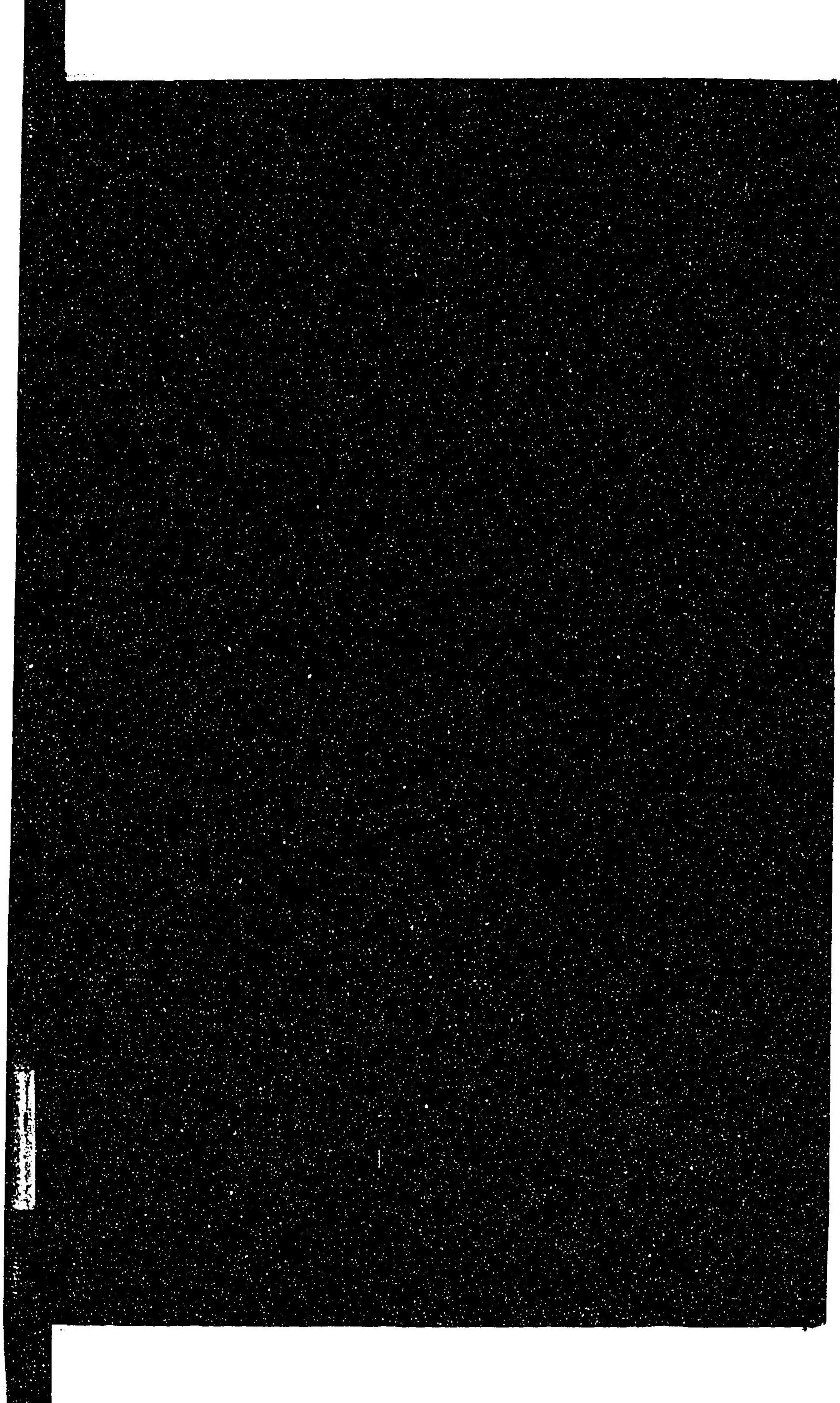
印刷所

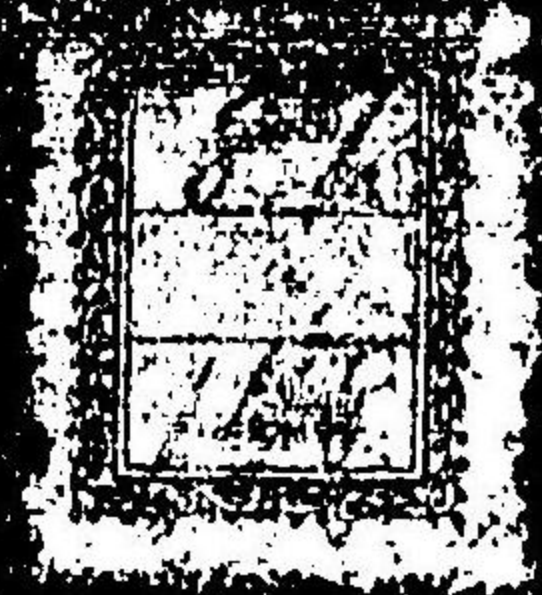
株式會社 秀英舍

志 露

實價參拾錢







094081-000-5

81-148

しら露

後藤 宙外/著

M31

DBQ-1554



